

県営圃場整備事業（春富地区）

——緊急発掘調査報告——

小御堂・根木谷中畑・上原遺跡

1977

伊那市教育委員会

南信土地改良事務所

県営圃場整備事業（春富地区）

——緊急発掘調査報告——

小御堂・根木谷中畑・上原遺跡

1977

伊那市教育委員会

南信土地改良事務所

序

近年、各地区で、埋蔵文化財、あるいは石造文化財等を含めた文化財保護思想の高揚が強く叫ばれるような傾向になってきた。このような動向のなかで我が郷土伊那市に於いても、文化財に関する報告書を刊行してまいりました。ここ数年来の傾向として伊那地区にも開発の波が押し寄せてきました。なかでも、その著しいものは農業構造改善事業であります。そのことによって埋蔵文化財の危機が生じてまいりました。本来ならば埋蔵しておくのが最ものぞましい姿でありますが、社会状況に対処するうえに記録保存という措置をとってまいりました。

ここに、報告する小御堂、根木谷中畑、上原の3遺跡は春富土地改良圃場整備事業地区に該当したので、事業にかかる前に調査を実施しました。その成果については、報告書の中に述べられていますが、時間的な都合により充分なる検討ができなかったことは誠に残念に思います。

調査に当っては、仮換地という型がとられたために、地元、土地改良区役員の理解を得なければ調査は不可能であったが、数人の役員の方からこころよく全面的な協力を得ることができたので、調査団長に友野良一先生をお願いして調査にとりかかりました。

発掘調査は7月下旬から9月上旬にわたって行なわれました。時期が夏だっただけに連日暑さに悩まされたが、ここに調査報告書が発刊されたことは誠に喜ばしい次第であります。

最後に、快よく御指導頂いた県教育委員会、並びに南信土地改良事務所、連日熱心に調査に当られた調査員、作業員の皆様等に対し深甚なる感謝の意を表する次第であります。

昭和52年3月10日

伊那市教育委員会

教育長 伊沢一雄

第Ⅰ章 まえがき 小御堂・根木谷中畑、上原遺跡の環境

第1節 位 置

小御堂遺跡は長野県伊那市富県南福地竹松部落にある。根木谷中畑遺跡は長野県伊那市富県北福地根本谷部落に所在している。上原遺跡は長野県伊那市東春近共栄部落にある。小御堂遺跡に至るまでの経路の最短距離は、国鉄飯田線伊那市駅を下車して、東へ500m 程県道を行くと天竜川にかかる中央橋という橋にぶつかる。さらに、この橋を渡って東へ1km 程行くと三峰川にかかる竜東橋という橋に達する。さらに、この橋を渡って1km 程東へ行くと、三峰川左岸第一段丘面にかかる。この段丘面は大部分が水田に利用されている。本段丘面の先端が最後に述べられている上原遺跡である。第一段丘面は東西に1.5km 程の幅をもって展開している。この段丘面を横切って、さらに東へと歩を進めていくと、段丘崖にぶつかる。この地点から上は三峰川第2段丘面である。この面に登ってまず、最初に目につくのは向って右側に近代的な白い大きな建物が目に映える。これがあのバルブで有名な北沢バルブである。この建物を後にして、さらに東へ向って2km 程行くと阿原部落という場所に出る。この部落の最後の十字路になったところに雑貨商を営んでいる亀屋商店にぶつかる。この十字路を右折すると南福地池部落へ、左折すると富県地区の繁華街にへと通じている。我々は直進して東へと進む、500m 程行くと、左手に大きな森が目に映える。この森は中世時代の城郭址として有名な竹松城跡であり、さらに、このなかに軍神として祀ったと思われる諏訪神社がある。この周囲が小御堂遺跡である。この小御堂遺跡から東へ1km 程登った地域が根木谷中畑遺跡である。

節2節 地形・地質

前述した3遺跡は竜東地区と総称される場所であり、三峰川に強い影響を受けている。そこで、簡単に三峰川について述べてみようと思う。三峰川は南アルプスにその源を発し、はじめはフォッサマグナに沿って北北西に流れ、黒川を合わせ、非持附近において、山室川と一緒になり、この地点で、西北にその流れを変え、高遠において藤沢川を合し、更に西に転じていただきたい西方に流下し伊那市において天竜川に注いでいる。三峰川は、高遠町を扇頂とするかなりの傾斜度をもった約9km の長さにおよぶ扇状地を形成し、天竜川を竜西地域に圧迫した感じのする地形を、竜東側に形成している。また、この扇状地が、すこぶる大きかったのではないかということを暗示するのは、伊那市西方5km 位のところにある平沢部落を流れる小沢川の現河床に、径1m 内外の花崗岩の巨碑が風化して多数存在することである。これは伊那山脈のものが、相当な力によって、多量に運搬されたものと考えられる。この扇状地を形成している砂、礫、の岩種は砂岩、泥岩、片麻岩、花崗岩、石灰岩等の赤石山脈、伊那山脈を構成している岩石で、それがここに見られるのは、両山脈から運搬されたものと考えられ、三峰川によって広大な扇状地が形成されたことを示すものではある

まいか。三峰川は、この扇状地を形成した後回春して扇状地面を優蝕し、左岸、右岸に同じく三段の河岸段丘を形成した。この前述した文章は上伊那郡誌の自然篇によるところ極めて大であった。

第3節 歴史的環境

今回・発掘した小御堂・根木谷中畠両遺跡は、南・北福地に含まれている。当地方はかつて、約4年程前に編纂された倭名類聚鈔の中に記された伊那郡福智（布久知）の郷の存在した附近であると推測されている。上伊那郡誌歴史篇によれば同郷は次のように記されている。「布久地」と訓み、今も伊那市富県に南福地・北福地の地名が残っている。郷の境をどこにするか、ということは勿論明確にできないことで、福地を中心にして自然地形などで区画されたおよそ50戸の範囲とするより他ないのであるが、およそ、北は三峰川、西は天竜川が境となり、河南、東伊那、中沢までを含めた地域が考えられ、貝沼、桜井の角地前から縁釉杯が発見されている点などから、ある時期にはこの聚落辺に福智郷の中心があったのではないかと推定されるが、最近になって東伊那栗林から出土した帰化人系統とみられる胃の発見があり、この地点にもまた、この郷の一つの中心的聚落が発達していたのではないかと思考される。何れにしてもこの郷を支配した郷長の存在を考えねばならないが、それが何処であったかを早急に推定することは、他の郷の場合と同様に相当に困難なことといわねばならない。」

上原遺跡は上那市東春近、三峰川左岸第二段丘面に存在し、場所的に、また発掘して検出された遺構より殿島城との関係を強く考えてみなければならない。篠田徳登氏著「伊那の古城」を参考にして簡単に概略を記してみると次のようになる。

「殿島城は伝承によれば伊那部但馬守重成の次男が築城したもので、その後、名前を殿島大和守と称した。場所は東春近農協の真東、高さ40cmの台地上にある。規模は南北48間、東西38間、面積は1824坪6反余りといわれている。周囲は原形、そのまま通りの土塁で囲まれ、その高さは3m程に及んでいる。」

春富地区で今までに確認された遺跡数は全部で46カ所あり、そのうち、発掘調査が行なわれたのは⑯の御殿場、⑰の阿原古墳、⑱の三ツ木遺跡の3カ所である。特に南福地、北福地の数多くの古墳は大部分、盗掘されてしまっている。

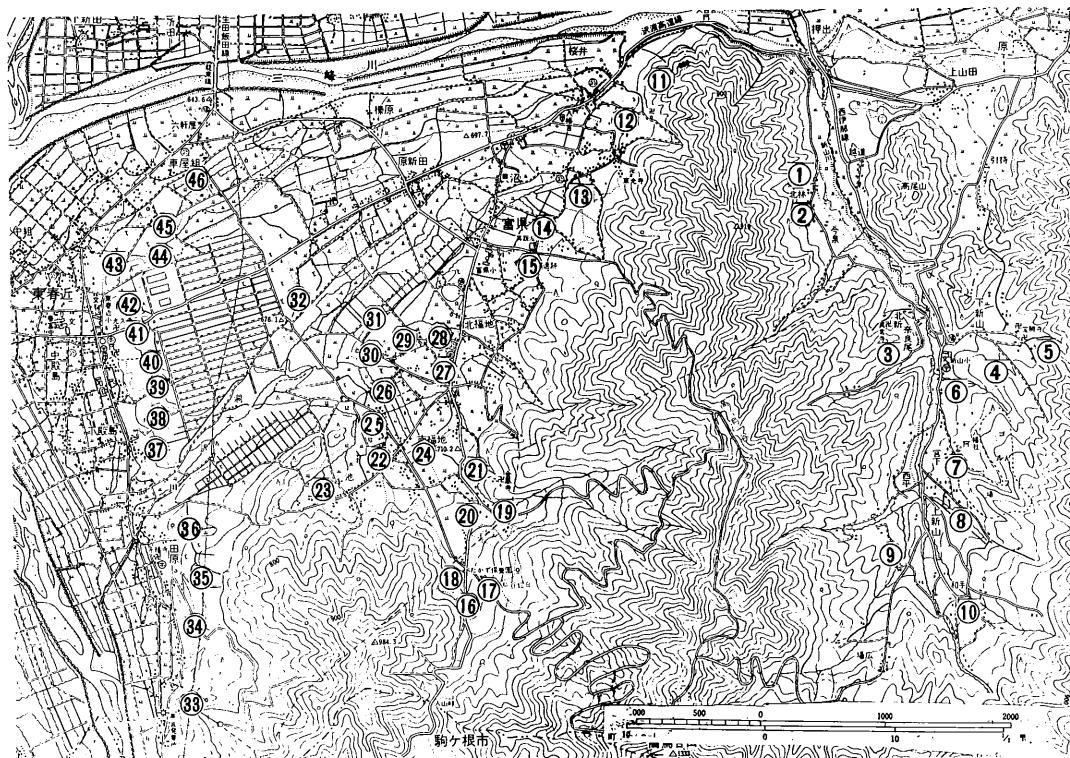
遺跡の分布状況は伊那山地の出張りが著しいために、その谷間をぬうような姿で遺跡が存在している。

①から⑩は新山川の河岸段丘土に発達しており、出土した遺物より時代は縄文早期から中世時代にまで至っている。

⑪から⑬は三峰川の第三段丘面と山麓より発達したいわゆる複合扇状地上に存在している遺跡群である。

御殿場遺跡は過去2回にわたって発掘調査が行なわれ、縄文中期時代の竪穴住居址18軒の発見、その他、多量の土器・石器の出土があった。なかでも、人面把手付番炉形土器は全国で出版される本の一頁を飾ったものだった。三ツ木遺跡は縄文早期押型文の遺跡として有名であるが、調査された報告書が刊行されていないのは誠に残念である。

(小池政美)



遺跡の名称

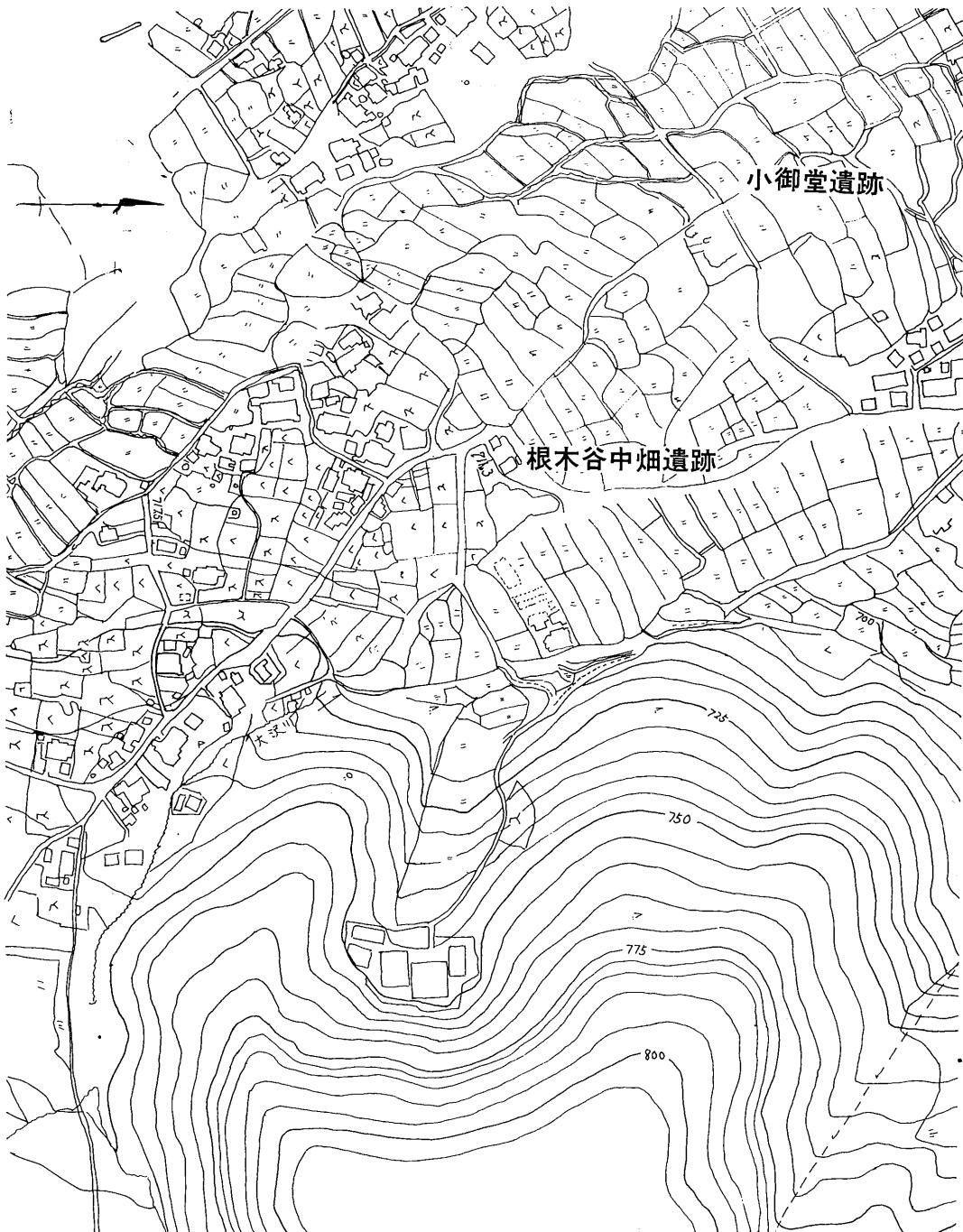
第1図 春富地区遺跡分布図

●富 県

- | | | | |
|---------|-------------|---------|---------|
| ① 北林 | ② 今泉 | ③ 奈良尾 | ④ 芝王 |
| ⑤ 舟ヶ洞 | ⑥ 中平 | ⑦ 宮原 | ⑧ 合の原 |
| ⑨ 小松 | ⑩ 和手 | ⑪ 大塚古墳 | ⑫ 上垣外 |
| ⑬ 宮の花 | ⑭ まこもが池 | ⑮ 御殿場 | ⑯ 菖蒲平古墳 |
| ⑰ テマテ古墳 | ⑱ テマテドウセギ古墳 | ⑲ 根木谷古墳 | ⑳ 根木谷中畑 |
| ㉑ 手間手 | ㉒ 不幸路 | ㉓ 八人塚 | ㉔ 小御堂 |
| ㉕ 阿原古墳 | ㉖ 高岱 | ㉗ 蚕玉古墳 | ㉘ 羽根原 |
| ㉙ 羽根田古墳 | ㉚ 駒合古墳 | ㉛ 三ツ木 | ㉚ 駒ヶ原 |

●東春近

- | | | | |
|----------|-----------|----------|---------|
| ㉓ 濑戸古墳群 | ㉔ 男塚古墳 | ㉕ 宮の上古墳群 | ㉖ 社宮司古墳 |
| ㉗ 田原寺古墳群 | ㉘ 古寺古墳群 | ㉙ 洞古墳群 | ㉚ 大沢古墳群 |
| ㉛ 本城古墳群 | ㉜ 宮場間様古墳群 | ㉛ 老松場古墳群 | ㉛ 下原 |
| ㉜ 中原 | ㉝ 上原 | | |



第2図 地形図 (1:4500)

凡 例

1. 今回の発掘調査は県営圃場整備に伴なう、土地改良事業で、第1次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営圃場整備土地改良事業に伴なう緊急発掘で、国・県・市の補助金のもとに、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和51年中度に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

小池政美、田畠辰雄

◎図版作製者

○遺構および地形

友野良一、小池政美、田畠辰雄、荻原 茂

◎土器実測図

田畠辰雄

◎写真撮影

○発掘及び遺構

友野良一、小池政美、田畠辰雄

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があった。

小御堂遺跡

目 次

序

凡 例 5

目 次 6

挿図目次 7

図版目次 7

第Ⅰ章 発掘調査の経過 8 ~ 10

　　第1節 発掘調査の経緯 8

　　第2節 調査の組織 8 ~ 9

　　第3節 発掘日誌 9 ~ 10

第Ⅱ章 遺 構 11 ~ 13

　　第1節 住 居 址 11 ~ 13

第Ⅲ章 遺 物 14 ~ 16

　　第1節 第1号住居址出土土器 14 ~ 15

　　第2節 第2号住居址出土土器 15 ~ 16

第Ⅳ章 ま と め 16

挿図目次

第1図	春富地区遺跡分布図	3
第2図	地形図	4
第3図	遺構配置図	11
第4図	第1号住居址実測図	12
第5図	第1号住居址カマド断面図	12
第6図	第2号住居址実測図	13
第7図	遺物実測図	14
第8図	遺物実測図	15

図版目次

図版1	遺跡全景
図版2	遺構
図版3	遺構

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

富県地区の県営圃場整備事業は、昭和48年度、桜井地区に於いて最初に着手され、昭和49年度には貝沼地区で行なわれました。幸いにも両地区には指定された遺跡は存在しませんでした。昭和51年の事業地区には小御堂遺跡が該当しましたので、工事着工以前に調査にかかる運びとなりました。

発掘調査地区は水田地帯であったが、夏場施行であったために、収穫等の問題でトラブルがなく調査は割合に順調に行なわれ、着手は9月上旬秋風が吹きはじめる頃に実施されました。小御堂遺跡の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託した旨、市教育委員会へ依頼を受けたので市教育委員会を中心にして、小御堂遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

南信土地改良事務所長と市長との間で、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節 調査の組織

小御堂遺跡発掘調査会

○調査委員会

委員長	松沢 一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井 喜夫	伊那市教育委員長
"	向山 雅重	長野県文化財専門委員
"	木下 衛	上伊那教育会会长
"	原 益久	南信土地改良事務所長
"	辰野 伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松 英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
"	有賀 武	" 課長補佐
"	白石 利彦	" 係長
"	三沢真知子	" 書記

○発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会员
"	御子柴泰正	"

調査員	小池 政美	長野県考古学会会員
"	田畠 辰雄	"
"	福沢 幸一	"
"	辰野 伝衛	"
"	赤羽 義洋	国学院大学学生
"	荻原 茂	東京薬科大学学生

第3節 発掘日誌

昭和51年9月1日 本日より発掘地区の小御堂遺跡にとりかかる。発掘場所は、現在、無住となり、したがってくずれかけた御堂の南東の場所である。午前中は、当地の近くにテントを設営するテントは全部で2張作り、1張りは休憩用に、1張りは道具小屋用にする。午後、発掘地区に南信土地改良事務所へ依頼しておいたブルドーザーが来て、耕土剥ぎを実施する。これが終了後、ただちにグリット設定にとりかかる。グリットの名称は南北1~15、東西にA~Oとし、一辺を2m×2m、面積を4m²と決めた。

昭和51年9月2日 本日より本格的な発掘調査にとりかかった。まずA1, C1, E1, G1, I1, K1, M1, O1の8グリットをあけてみると、ローム層面までは約40cm位と割合に浅かった。おそらく、水田造成のおりの耕作土の移動がかなりあったものと思われた。一日中かかって8グリットの掘りあげを完了する。遺物はかなりの量は出土したが、全て破片であった。遺構の存在は全くないようなかっこうであった。

昭和51年9月3日

本日は昨日に引き続
いてグリット掘りを南
側へと進めて3ライン
の8カ所のグリットを
掘り進めていく。一日
中掘ってみた。結果は
昨日とほぼ同様であつ
た。

昭和51年9月4日

昨日、一昨日と遺構
らしきものは発見され
なかつたので、今日は
遺構をみつけようと調
査員や作業員達はみな
張り切っていた。



発掘風景

作業内容はグリット掘りを南へ南へと進めていくことであった。本日は5ラインの8カ所を掘り進めてみるが、一日中かかつて8カ所のグリットを掘ってみるが、結果は昨日、一昨日とほぼ同様であり、みんなあせりの色が出てきた。

昭和51年9月5日 本日も同様にグリット掘りを南へ南へと進めていく。もう、本日は遺物の出土がかなりあったので、どこかに遺構は確実にあるものと心に決めて調査にとりかかった。本日はおもい切って7ラインと9ラインの2本のグリットをあけてみることにして、仕事を進めていくと、まず最近にB9グリットに落ち込みがあり、つづいて、Eグリットに落ち込みがみられた。ついに、さがし求めていたものを発見した。何んとも表現しようのない心地がしてさわやかなものであった。前者を第1号住居址、後者を第2号住居址と決め、附近を拡張して、プラン確認に全力を注ぎ込む。夕方まで、かかってほぼ両住居址のプラン確認が一段落となった。

昭和51年9月6日 昨日、2軒の住居址が発見されたために作業員一同に朝から活気があって、何かすごいものをみつけたすぐと口ぐちにさけんでいた。両住居址の掘り下げを同時に併行して進めていく、掘り下げて行きだすと、覆土中より土師器、須恵器、灰釉陶器が出土ってきて、大般両住居址の時代が明らかとなってきた。

昭和51年9月7日 昨日に引き続いて両住居址を掘り下げていくと、その形が刻一刻と明らかになってきた。カマドも姿をあらわし、時を経るに従って住居址としての休裁を整えてきた。遺物の量は最初に期待していたほど出土しなかった。

昭和51年9月8日 本日は両住居址の仕上げの段階である。第1号住居址を掘り下げていく段階では極めて記しておくべき特徴はみあたらなかったが、第2号住居址は火災にあったとみて、いたるところに、焼土や炭化物が検出された。

昭和51年9月9日 本日、作業員達を半分づつに分けて、一方では住居址の清掃並びに写真撮影及び実測を手伝せた。一方では残りのグリットを掘らせた。後者の作業状況は遺物の出土量が少なかったので、思ったより作業の進行状況が早くて、夕方までに27グリットを完掘したが、遺構は何も発見されなかった。

昭和51年9月10日 本日をもって、小御堂遺跡発掘を完了した。すぐに、みんなで発掘器材のあとかなづけをして終了とした。

昭和52年1月 報告書作製に必要な図面の整理及び作製図版の整理及び作製をする。

昭和52年2月 報告書の編集と同書を印刷所へ送る。

(小池政美)

第II章 遺構

第1節 住居址

第1号住居址（第4図、図版2）

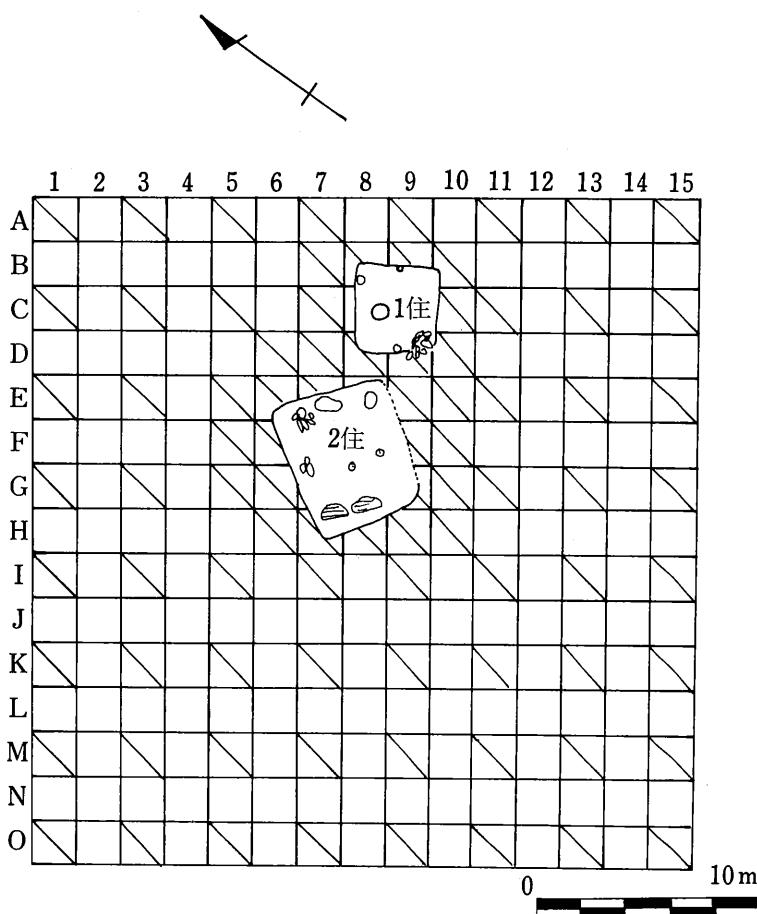
B8～B10, C8～C10, D8～D10の9グリットにまたがって発見された竪穴住居址である。平面プランは方形を呈し、規模は3m88cm×3m70cmを測定できる。壁高は8～12cm位の範囲に含まれている。本址はローム層を掘り込んで構築しており、覆土はその上層の黒褐色土層が落ち込んでいる。

カマドは西壁の北寄りに、原形はとどめないが、床面を若干掘りほくぼめた痕跡が認められ、焼土も検出され旧カマドと、南壁の東隅に石組粘土カマドがある。新カマドも当住居址は耕作面からほんのわずか下った所で発見され、為に、カマドも耕作によって位置等がズレているものと思われる。

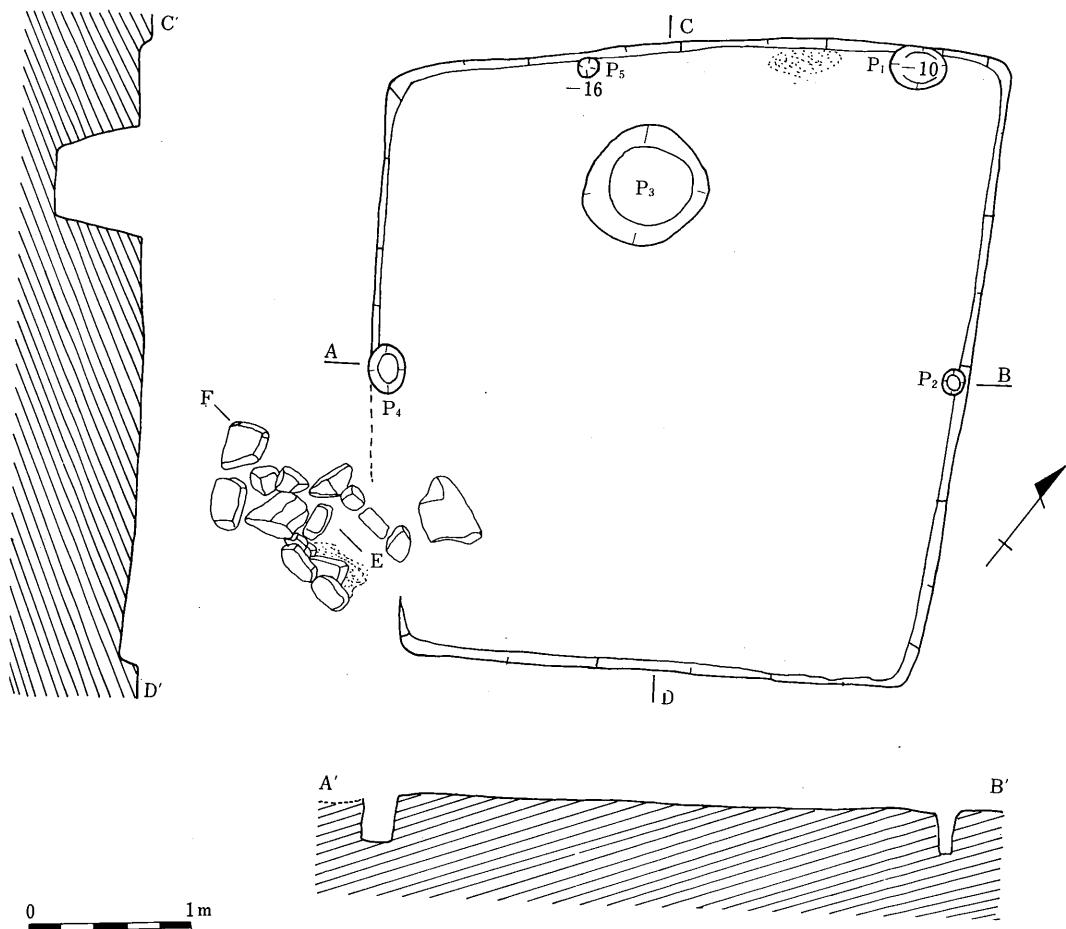
当住居址に附属すると考えられる柱穴は4ヶでP₁は34cm×26cm、深さ10cm, P₂は16cm×14cm, P₄は30cm×24cm, P₅は14cm×12cm深さ16cmを計る。

当住居址の遺物は第III章遺物で詳細な説明をするが、その主なものをここに記しておくことにする。それは土師器甕、土師器杯、須恵器杯、須恵器蓋杯、灰釉陶器皿である。これらの出土品より平安時代前半の住居址と思われる。

P₃は78cm×74cmを測定できる。大きさからして住居址内に切り込んだ土塹と思われる。壁は直立し、床面は固く叩いてあり、平坦であった。



第3図 遺構配置図



第4図 第1号住居址実測図

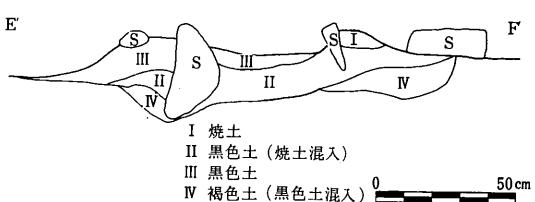
第2号住居址（第6図、図版2）

本址は長方形プランを呈する竪穴住居址である。規模は南北6m10cm、東西4m48cmを測定でき、壁高は10cm~14cmを計算できる。東壁の一部は確認できなかった。カマドは北壁西隅に石組粘土カマドがあるが、完全にくずれており、原形はとどめていない。

当住居址は火災にあった住居址と考えられ、床面から10~15cm位上に、焼土と木炭が、多量に検出された。柱穴は2ヶ所確認できたのみで、

壁外柱穴などは、検出できなかった。P₁は22cm×24cm、深さ11cm、P₃は60cm×46cm深さ17cmを計り、P₂は土括で、1m28cm×68cmを計る。

床面は固い叩きで、若干の凹凸があるが良き好、南隅のところで、一部貼床がみられた。壁はやや外傾する。

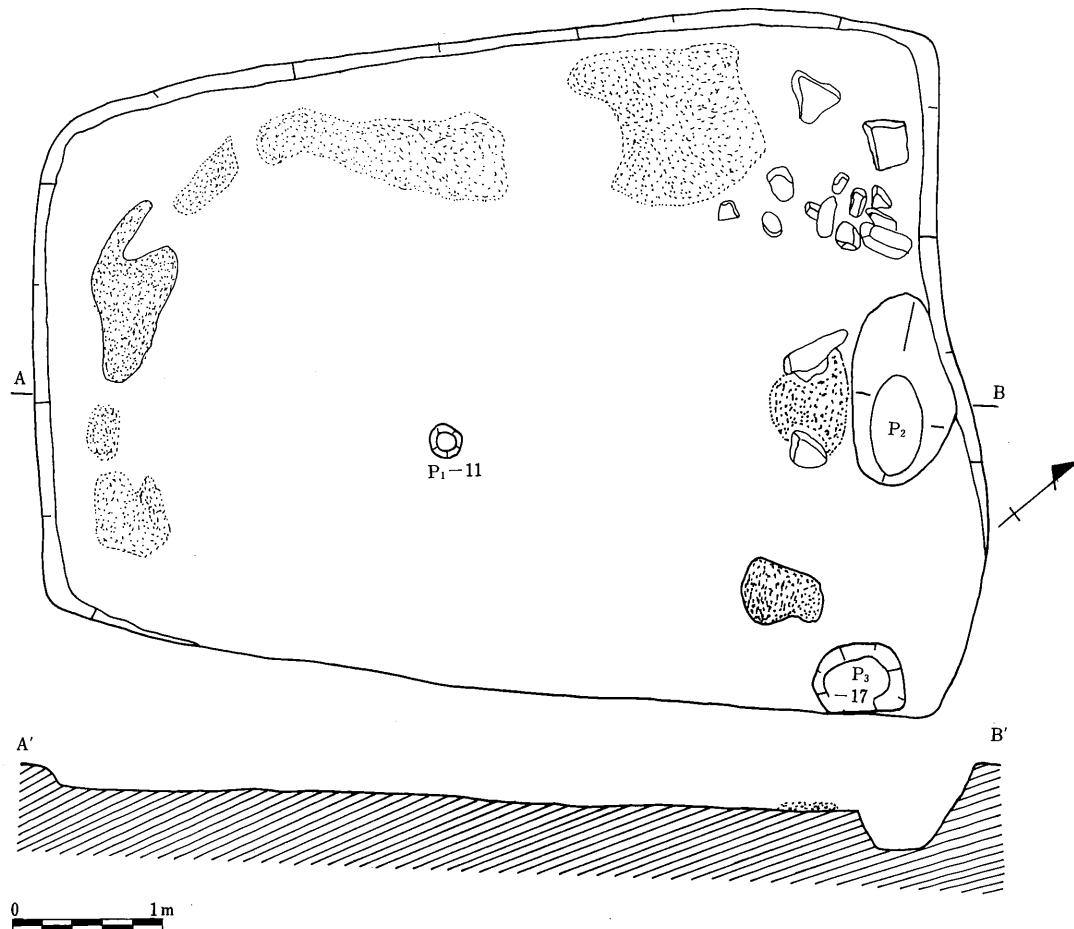


第5図 第1号住居址カマド断面図

住居址北壁中央にもカマド状の遺構が検出されたが、切り合い等は不明。

遺物は土師器甕、土師器杯、灰釉陶器碗、須恵器片等が出土した。これらの遺物から察してみると本住居址は9世紀後半から10世紀前半にかけてのものである。もっと時代をわかりやすく説明するならば平安時代の前半と考えてよかろう。

第1号住居址と第2号住居址は大般同一年代の住居址と考えられ、もう少し広い面積を発掘したならば数多くの住居址が発見されたものと思われる。
(田畠辰雄)



第6図 第2号住居址実測図

第III章 遺物

第1節 第1号住居址出土土器

土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。土師器の甕は長胴のものが多いようで、太い、粗いカキ目、細いカキ目痕を有するもの、杯は内黒のものが主体である。須恵器では、甕の胴部片、壺の底部片、坏、蓋坏などが出土、土師器に比べ出土量は少ない。灰釉陶器は皿が出土している。

土師器甕（第7図、(1)）

外面黒褐色、内面茶褐色を呈し、小石粒、雲母を含む粗雑な胎土をもつ、整形技法は口縁から頸部上まで横ナデ、頸部から胴部にかけて、太く粗いカキ目が縦方向に施されている。内面は口縁から頸部にかけて横ナデ、以下はめだった整形はおこなわれていない。口径 28.1cm を計る。

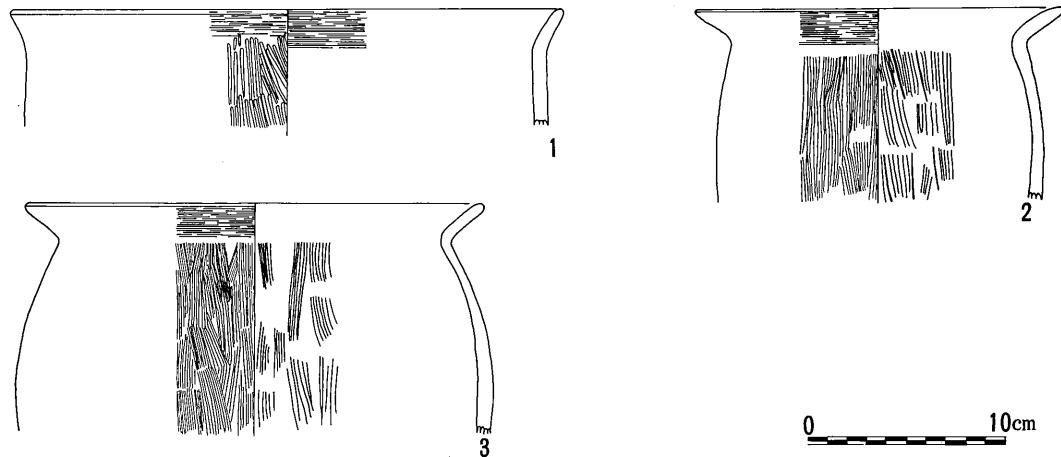
土師器杯（第8図、(1~3)）

(1~3) はともに内面黒色であり、口縁は外反し、(1~2) は胴部に丸味をもつ。1 は外面の色調は灰茶褐色、一部黒色を呈する。小石粒を含む胎土をもち、内面は若干の研磨がみられる。底部は糸切り、口径 13.6cm、底径 6.4cm、器高 4.1cm を計る。2 は外面茶褐色を呈し、小石粒、雲母を含む、内面は研磨されておらず、少し荒れている。口径 11.5cm。

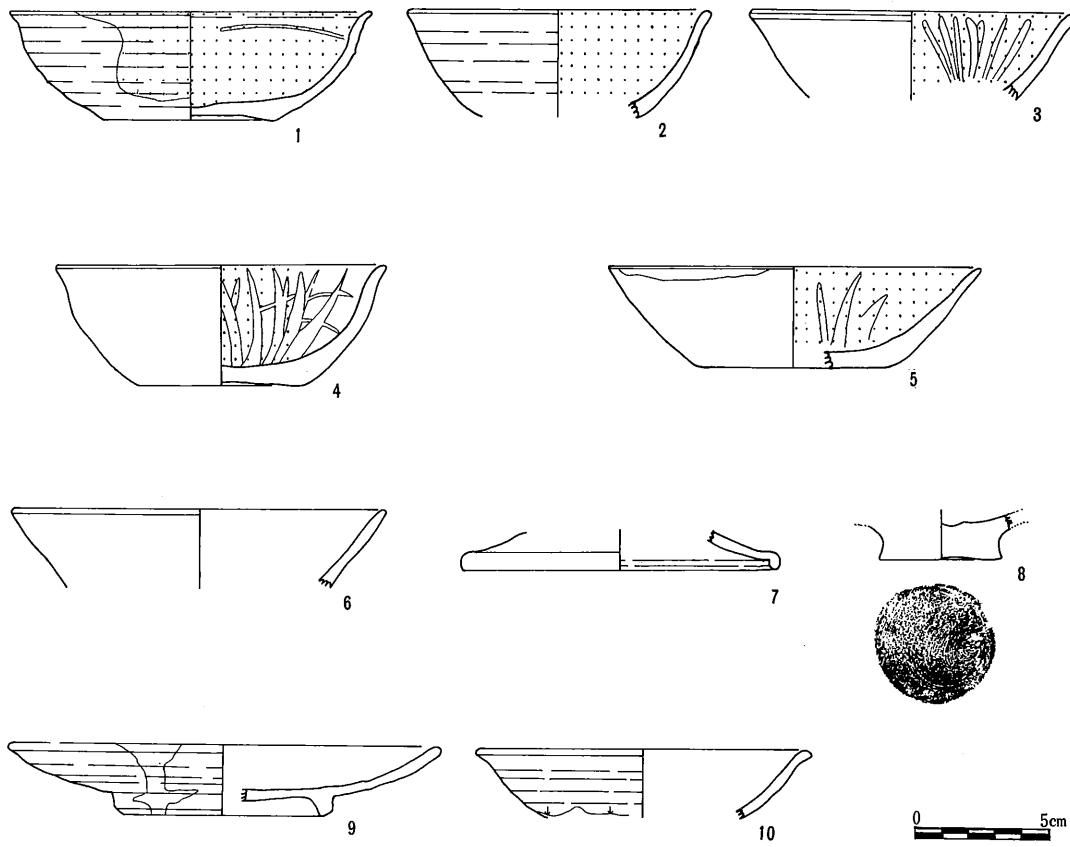
3 は外面灰褐色、小石粒を含む胎土をもち、口径 2.3cm、内面は石磨されており暗文がはいっている。

須恵器杯（第8図、(6)）

6 は外面暗青灰白色、内面灰白色を呈し、小石粒少量を含む胎土をもつ、口縁は直にのび、口径 14.1cm を計る。



第7図 遺物実測図



第8図 遺物実測図

須恵器蓋杯（第8図(7)）

7は外面ともに青灰白を呈し、口径11.8cmを計る蓋である。

灰釉陶器皿（第8図(9)）

9は灰釉で、口径16.4cm、底径7.4cm、器高2.7cmを計る。

第2節 第2号住居址出土土器

土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。土師器の甕は、やや粗めのカキ目痕のあるものが多く、杯は内面黒色のものが多い。須恵器は破片が少量、甕、杯などが出土、灰釉陶器も少量伴なっている。

土師器甕（第7図(2~3)）

2は外面暗黒褐色土、内面暗灰褐色を呈し、雲母少量、小石粒を含み、粗雑な胎土である。整形技法は、外面、口縁部は横ナデ、頸部以下胴部にかけては内外面ともに、やや粗目のくし状工具による縦方向のカキ目が施されている。外面に比べ、内面のカキ目痕の方が粗い。口径18.7cm。

3の色調は外面明淡褐色、内面黒褐色を呈し、小石粒、雲母を含む粗雑な胎土をもっている。外面口縁部横ナデ、頸部以下胴部にかけて、やや荒めのくし状工具による縦方向のカキ目、内面も外面より雑ではあるが、同様の整形がみられる。口径 23.3cm。

土師器杯 (第8図(5, 8))

内面黒色で、やや研磨されており、暗文のあるもので、外面は灰褐色を呈する。口縁は直にのび胴部の丸味もさほどでない。

8は灰褐色を呈す小型の杯で、小石粒、雲母を含み、底部糸切りで、底部が高台のごとくに、厚く出張っている。5は口径 14.0cm、底径 7.0cm、器高 3.9cm、8は底径 4.7cm を計る。

灰釉陶器塊 (第8図)10))

10は灰釉陶器の塊で、口径 12.7cm を計る。

(田畠辰雄)

第IV章 まとめ

本遺跡は、根本谷中畠遺跡の西方約 1km 程のところに位置しており、発掘地点より東の地帯は、耕土下に砂礫層が厚く堆積する一帯であり、南・北の一帯は沼地となっている。南には沢が一本流れしており、住居址はこの沢近くから発見された。

本遺跡からは 2軒の住居址が検出されたが、耕作面からわずか下った位置であり、その保存状態は良好ではなかった。

灰釉陶器は見散される程度ではあるが、皿・塊が出土しており、黒窓 90 号窯期に比定しうるものである。

須恵器についてみると、塊・蓋は、端部が急角度で折れる器高の高いものと思われるものが出土しており、新しいタイプのものである。塊は、ロクロによる整形痕があまり目立たないものであり、胎土も粗雑なものが多く目についた、他に、甕・壺等の胴部片も出土している。

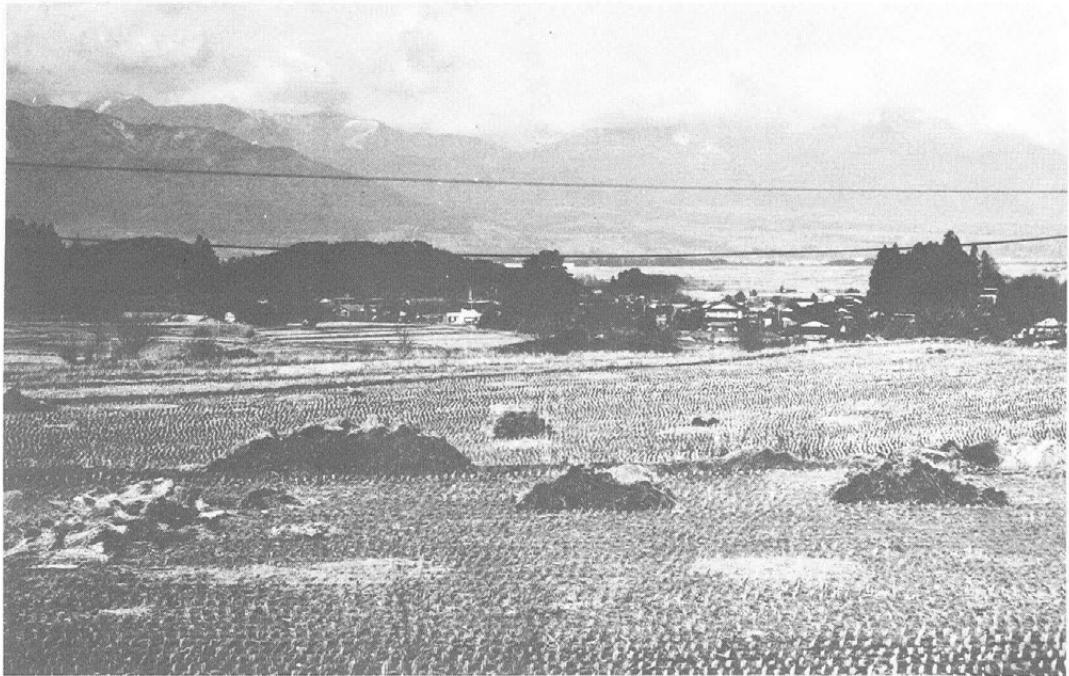
土師器は、甕、塊が出土しており、甕は長胴のものが多く、その整形は、胴部にカキ目痕を有するものが圧倒的に多い。また、そのカキ目は胴内面でも同様にみられるが、外面のカキ目よりは粗く、丁寧ではない。塊は他のものに比べて、量的には一番多く出土されており、その形状は塊に近く、内面黒色で、研磨され、底部は糸切のものが多くみうけられる。内面があまり研磨されておらず、がさついた胎土のものも見散された。

第8図-8は、底部が高台のごとくに厚く張出し、糸切、色調は灰褐色を呈す特長のある器形をしており、カワラケの粗形かとも考えられるが、資料の増加を待って、検討を後にゆずりたい。

以上出土遺物から検討してみたが、これらの遺物は 10 世紀後半から 11 世紀頃にかけての時期に比定できるものと考える。

(田畠辰雄)

図 版



遺跡地を東側より眺む

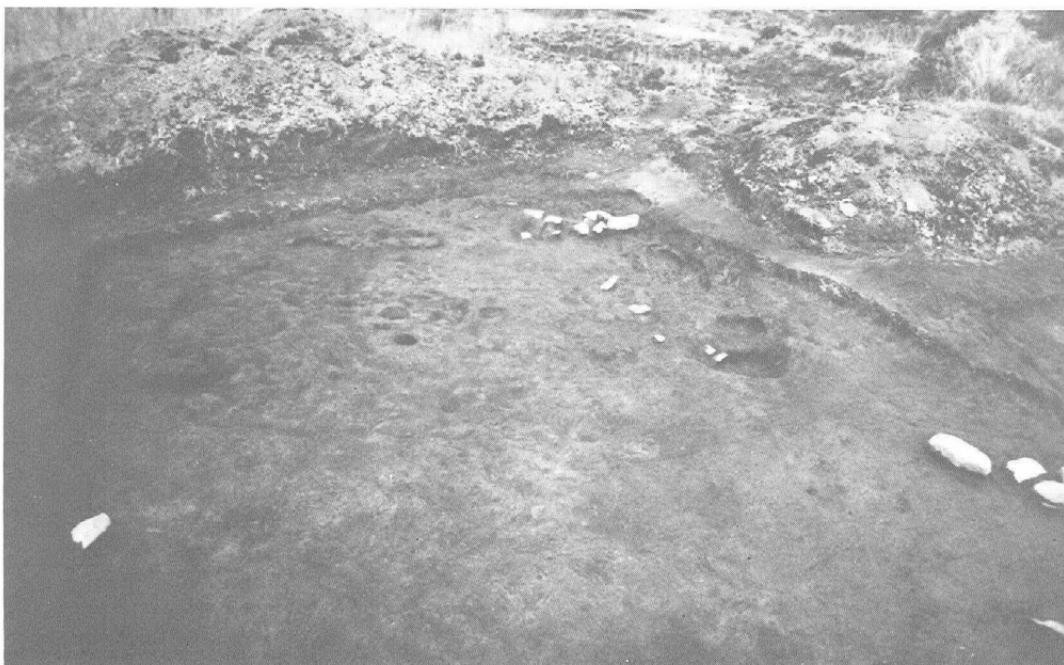


遺跡地を南側より眺む

図版 1 遺跡全景



第1号住居址



第2号住居址

図版2 遺構



第1号住居址カマド



第2号住居址カマド

図版3 遺構

小御堂遺跡緊急発掘調査報告書

昭和 52 年 3 月 15 日 印刷

昭和 52 年 3 月 18 日 発行

発行者 伊 那 市 教 育 委 員 会

印刷所 岡谷市川岸 108

中 央 印 刷 株 式 会 社

上 原 遺 跡



目 次

目 次.....	3
挿図目次.....	4
図版目次.....	4
第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	5～7
第1節 発掘調査の経緯.....	5
第2節 調査の組織.....	5～6
第3節 発掘日誌.....	6～7
第Ⅱ章 遺 構.....	9～15
第1節 住 居 址.....	9～10
第2節 穴.....	10～11
第3節 集石土塙.....	12～13
第4節 土 塙.....	13～14
第Ⅲ章 遺 物.....	16～18
第1節 土 器.....	16～18
第2節 石 器.....	17
第3節 鉄器・古銭.....	18
第Ⅳ章 ま と め.....	19

挿 図 目 次

第1図 地形図	8
第2図 遺構配置図	9
第3図 第1号住居址炉址断面図	10
第4図 第1号住居址及び第1号土塙実測図	10
第5図 第2号住居址実測図	10
第6図 第1号竪穴実測図	11
第7図 第2号竪穴実測図	11
第8図 第3号竪穴・第3・8号土塙実測図	12
第9図 第1号集石土塙実測図	12
第10図 第2号集石土塙実測図	13
第11図 第3号集石土塙実測図	13
第12図 第4号集石土塙実測図	13
第13図 第5号集石土塙実測図	14
第14図 第2号土塙実測図	14
第15図 第4号土塙実測図	14
第16図 第5号土塙実測図	15
第17図 第6号土塙実測図	15
第18図 第7号土塙実測図	15
第19図 第1号住居址、第4号集石土塙出土土器実測図	16
第20図 竪穴、集石土塙、土塙出土土器、陶磁器、鉄器実測図	17
第21図 第3号竪穴出土、石臼実測図	17
第22図 古銭拓本	18

図 版 目 次

図版1 遺跡全景
図版2 遺構
図版3 遺構
図版4 遺構
図版5 遺構
図版6 遺構
図版7 遺構及び遺物出土状況

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経過

東春近地区的県営圃場整備事業は、車屋の三峰川氾濫原は何年にもわたって実施されてきました。昭和51年度は三峰川の左岸第一段丘面が該当地区になり、ここは上原遺跡として指定されていましたので、工事着工以前に調査にかかる運びとなりました。

発掘調査は水田地帯であったが、夏場施行であったために、調査は割合に順調に行なわれ、着手は7月下旬、梅雨明けを待って実施した。上原遺跡の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おって、南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託した旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市教育委員会を中心に、上原遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

南信土地改良事務所長と市長との間で、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

当地に於ける発掘地区設定には東春近村誌によるところが極めて大であったことを記しておく。

第2節 調査の組織

上原遺跡発掘調査会

○調査委員会

委員長	松沢 一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井 喜夫	伊那市教育委員長
"	向山 雅重	長野県文化財専門委員
"	木下 衛	上伊那教育会会长
"	原 益久	南信土地改良事務所長
"	辰野 伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松 英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
"	有賀 武	" 課長補佐
"	白石 利彦	" 係長
"	三沢真知子	" 書記

○発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会员
"	御子柴泰正	"

調査員	小池 政美	長野県考古学会会員
"	田畠 辰雄	"
"	福沢 幸一	"
"	辰野 伝衛	"
"	赤羽 義洋	国学院大学学生
"	荻原 茂	東京薬科大学学生

第3節 発掘日誌

昭和51年7月19日 伊那市東春近共栄部落の発掘地区にグリットを設定し、その発掘調査にとりかかる。そのグリットは南北に1~16、東西にA~Sまでである。午後は発掘地区的南側の方へテントを設営した。

昭和51年7月20日 昨日設定したグリットを一つ置きに掘りおこしていく。遺物はぼつぼつ出土したが、いずれも破片であった。時代は鎌倉から安土桃山時代に至るもので、それは、内耳鍋、天目茶碗、その他、施釉陶器であった。これらに混じって、朝鮮通宝の出土がみられた。

昭和51年7月21日 昨日に引き続き、グリットを南、東へ掘り進めていくと、ところどころに色の変わった落ち込みがみられた。L6附近に方形の黒々とした明瞭なる落ち込みを住居址と判断して、第1号住居址とする。本址の中央部に内耳鍋が炉に使用したとみて、埋甕状のかっこうで発見された。また、水田造成の為に壁は大部分、こわされてしまったとみて、壁は存在しなかった。住居址の面影としては、かたい叩きの床面が残っていたに過ぎなかった。

昭和51年7月22日

第1号住居址の東側で、本址を切るようにして、土塙が検出され第1号土塙とする。掘り進めていくと、なにより内耳土器片が出土本日より梅雨明け宣言が出され、一日中暑い日であった。第1号土塙の南側のK10附近で第1号集石が検出され、これを掘り進めていく、本遺構を掘り進めていくと、掘り込み

面より50cm位下った



発掘風景

面に美しく石を敷きつめてあった。第1号土塙を完掘し、写真撮影をする。第1号集石の石を洗い出しにして、その上に水をまいて、清掃を終え、写真撮影をする。

昭和51年7月23日 第1号集石の西側に方形状の黒い落ち込みがあり、これを第2号住居址とする。床面はわずかな叩きになっており、中世時代独特の住居址となった。第2号住居址の西側に石が発見され、これを第2号集石とする。また、同住居址の北東の位置に、円形状の石をもった遺構が2つ発見された。これを東側より第3号集石、第4号集石とした。第2号集石から第4号集石までの石を洗い出して、写真撮影をする。第2号集石から第4号集石の全て遺構内から内耳土器片が出土した。

昭和51年7月24日 第2号住居址の北側に方形状の集石が発見され、第5号集石とする。なにより内耳土器片が出土した。石の洗い出し、写真撮影をする。第5号集石の北側に方形の竪穴が発見され、G6、H8、H4のグリットをそれぞれの遺構の中心部であった。前から、それを第1号竪穴、第2号竪穴、第3号竪穴と決める。

昭和51年7月26日 前日、検出された3つの方形状の竪穴を掘り下げていくと、どの竪穴からも内耳の土器片の出土があった。特に極だった遺物として、第3号竪穴より明の青磁の碗と安山岩製の石臼が出土した。

昭和51年7月27日 第1号住居址の南側にMラインに3つの土塙が検出され、それを掘り下げて完掘をすませる。また、第1号竪穴と第3号竪穴の周囲には3つの土塙が発見された。前者の土塙の各称を第3号土塙、第4号土塙、第5号土塙、後者の土塙の名称を第6号土塙、第7号土塙、第8号土塙とつける。

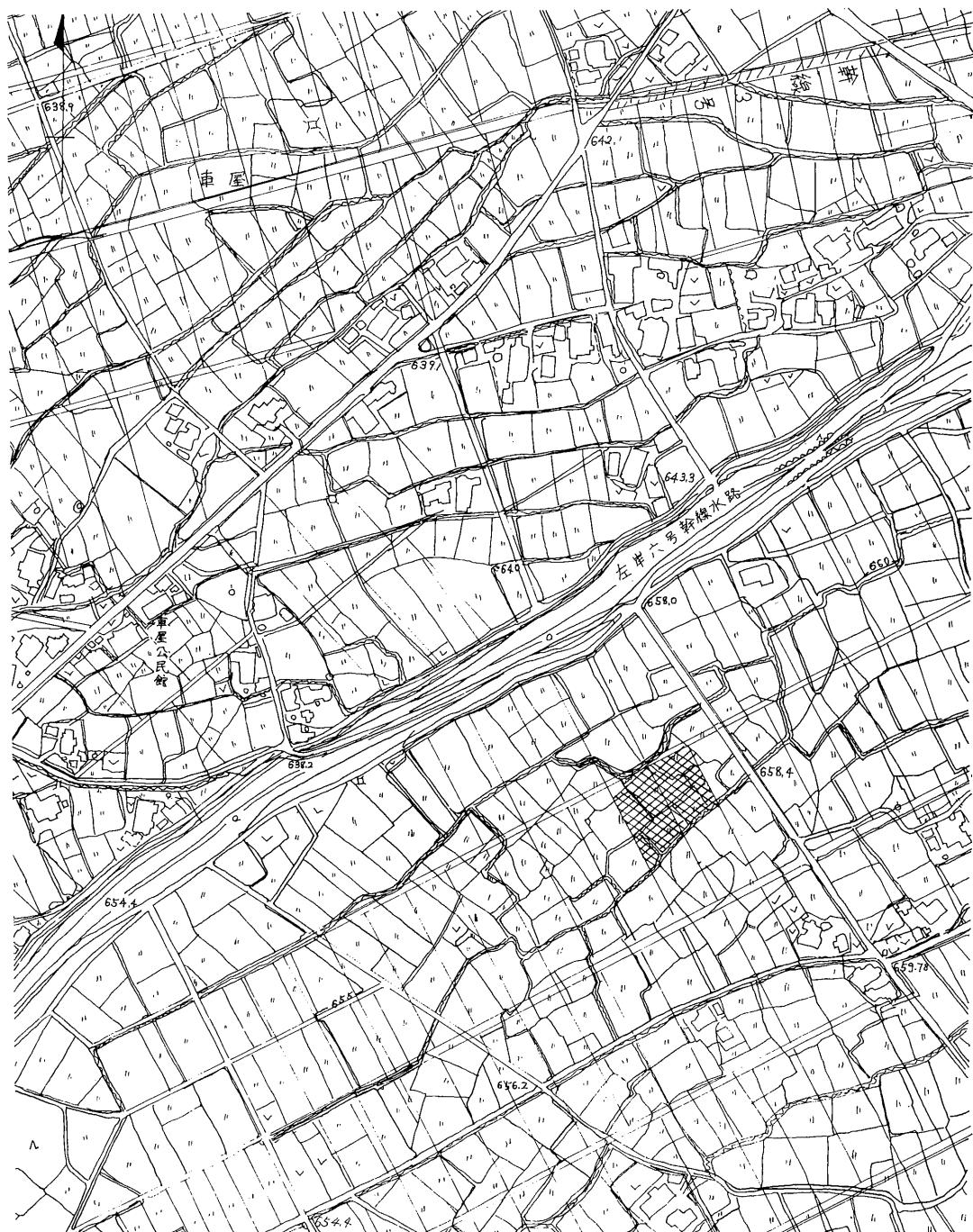
昭和51年7月28日 本日は全遺構の掘り残した部分を全て掘り尽す。ならびに、今まで、写真撮影をした遺構も全て、初めからもう一度写真撮影をする。全ての遺構とは第1号住居址、第2号住居址、第1号竪穴から第3号竪穴、第1号土塙から第8号土塙、第1号集石土塙から第5号集石土塙である。

昭和51年7月29日 作業員達と調査員が手わけで、前日述べた全ての遺構の実測をする。その他に全測図の作製もした。

昭和52年1月 報告書作製に必要な図面の整理及び作製図版の整理及び作製をする。

昭和52年2月 報告書の編集と同書を印刷所へ送る。

(小池政美)



第1図 地形図 (1 : 4500)

第II章 遺構

第1節 住居址

第1号住居址（第3～4図、図版2）

K4～5, L4～6, M4～6 の8グリットにまたがって発見された中世の竪穴住居址である。

耕作面からわずか下ったところで炉址が発見され、それより床面を追ったが、壁等は検出不可能であった。プラン・規模等は不明であるが、方形を呈すものと思われる。

床面はそれほど固くはなく、中央部（炉址周辺）がやや高く、周辺部へゆくにしたがい低くなっている。炉址は、内耳なべを床面下に埋める。埋甕炉の形態をとり、焼土が少量検出された。

本址に付属すると思われるピットは3ヶ検出され、P₁39×32cm, 深さ10cm, P₂28×25cm 深さ21cm, P₃34×30cm, 深さ35cmを計る。

第2号住居址（第5図、図版2）

H12～13, I12～14, J12～14 の8グリットにまたがって発見された中世の竪穴住居址である。

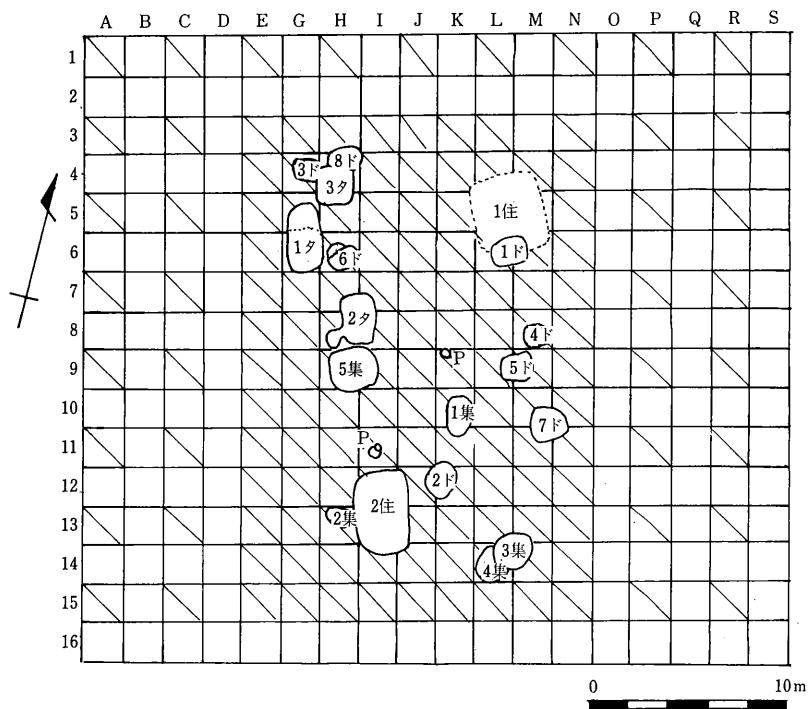
礫混入の茶褐色土を

掘り込んでいる。覆土
は砂質黒褐色土。

平面プランは胴張り
の長方形を呈し、規模
は長、短軸がそれぞれ
392cm×323cm、壁高
は45～50cmを計る。

炉址は住居址内南東
寄りにあり（60×57
cm、深さ約25cm），
床を掘りくぼめた地床
炉である。

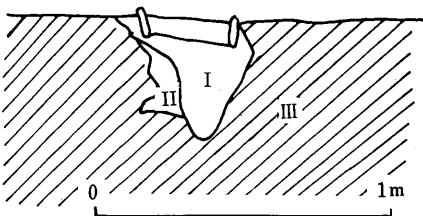
柱穴は壁を切ってP₄
があり、（50×50cm，
深さ約60cm）他にも
南壁の東西に、壁を切
ってピットらしきもの
が検出されている。また
床面は軟弱で、砂質



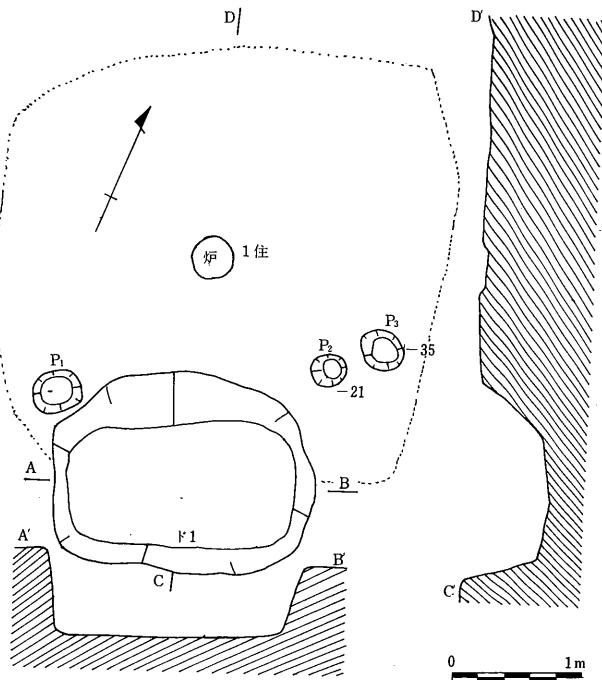
第2図 遺構配置図

暗茶褐色土の貼床である。貼床下は礫混入の砂質暗褐色土層で、遺構等は認められなかった。

両壁の中央部、壁面から壁ぎわ床面にかけて、カマドを思わせるような集石が検出されたが、焼土等はない、性格不明であり、別遺構かとも考えられる。集石下に遺構は認められなかった。



第3図 第1号住居址炉址断面図



第4図 第1号住居址及び第1号土塙実測図

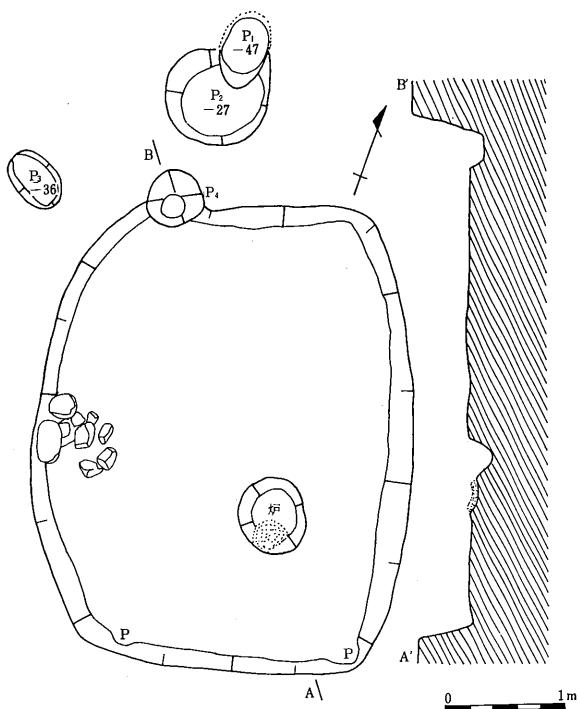
第2節 竪 穴

第1号竪穴（第6図、図版2）

G5~6, H5~6の4グリットにまたがって発見された集石をもつ竪穴址である。

平面プランは長方形のプランを呈し、規模は長、短軸がそれぞれ333×216cm、深さは集石のない部分で38cm、集石のある部分が72cmを計る。浅い部分(北側)と集石上面は砂質黒褐色土の覆土で、検出面から約35cm前後掘り下げるとき集石があらわれる。壁はやや外傾ぎみであり、床面は砂礫混りで、軟弱ではあるが、ほぼ平坦な床である。

礫混入の茶褐色土を掘り込む遺構であるために、壁面には小礫が多くはいっており、くずれやすい壁面である。第2・3号竪穴と異なり、浅めで、集石をもち、墓塙とするには大きめ、地下倉とみるには浅すぎる。



第5図 第2号住居址実測図

第2号竪穴（第7図、図版2）

H7~8, I7~8の4グリットにまたがって発見された竪穴址である。

平面プランは長方形を呈し、規模は、長短軸がそれぞれ250×187cm、深さ87cmを計る。

覆土は礫混入の砂質暗褐色土、礫混りの茶褐色土を掘り込む遺構である。

南西の隅に張出し部をもち、張出し部はほぼ長円形のプランを呈し、長・短軸がそれぞれ108×80cm、深さ70cm、28×20cm前後の石が覆土上層から床面上まで入っている。

竪穴の壁は外傾し、床面はほぼ平坦、張出し部の壁は、西壁は外傾するが、他の壁はほぼ直立し、床面は中央部がやや凹んでいる。中世地下倉と考えられる遺構である。

第3号竪穴（第8図、図版3）

G4~5, H4~5の4グリットにまたがって発見された竪穴址である。

平面プランは方形を呈し、規模は長・短軸がそれぞれ200×184cm、深さ102cmと計る。

第3号、6号土塙を切っており、礫混りの茶褐色土を掘り込み、覆土は小礫混入の砂質黒褐色土、下層は褐色が強くなる土層である。

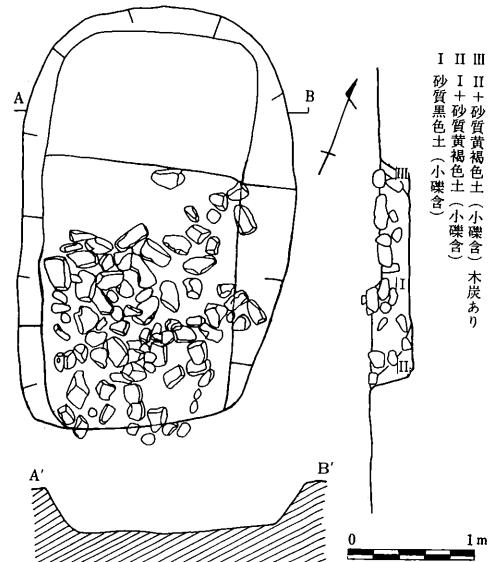
壁は直立しているが、中層あたりから砂が多い量に含まれる地層となり、小礫も多く含むために、くずれやすくなっている。

床面は砂礫混りであり、やや軟弱であるがほぼ平坦な床をもっている。

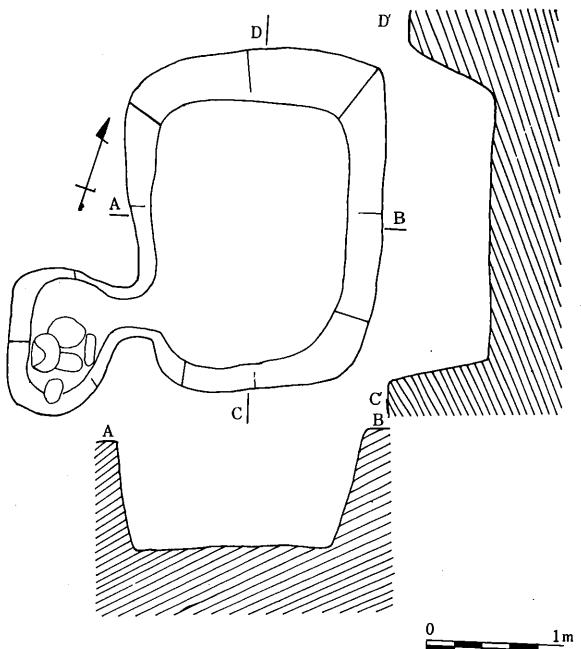
床面あるいは、壁外に柱穴、ピット等の施設は確認できなかった。

第1~3号竪穴中、本址だけがほぼ方形を呈し、深さも一番深く、しかりした形態を感じさせる遺構であった。中世の地下層と考えられる遺構である。

I II III
II + 砂質黃褐色土（小礫含）
I + 砂質黃褐色土（小礫含）
砂質黑色土（小礫含）
木炭あり



第6図 第1号竪穴実測図



第7図 第2号竪穴実測図

(田畠辰雄)

第3節 集石土塙

第1号集石土塙（第9図、図版4）

K10~11の2グリットにまたがつて発見された集石土塙である。

平面プランは丸味をもっているが長方形に近く、規模は長・短軸がそれぞれ187×113cm、深さ65cmを計る。

礫混入の暗茶褐色土を掘り込み、覆土土層は砂質黒褐色土である。この砂質黒褐色土を掘り進めて行くと検出面から約22~25cm下から礫がぎっしり入っており、砂質黒褐色土の覆土とともに床面まで続いている。

礫は一抱もある大きなものから、にぎりコブシ大のものまでが雜然と入っており、この集石中に安山岩質の石臼のカケラも1ヶ含まれていた。

壁は直立しており、また礫を含んでいる。床面は砂礫混りのやや凹凸のある床で、中世の土塙墓と考えられる。

第2号集石土塙（第10図、図版2）

H13のグリットから発見された集石土塙である。

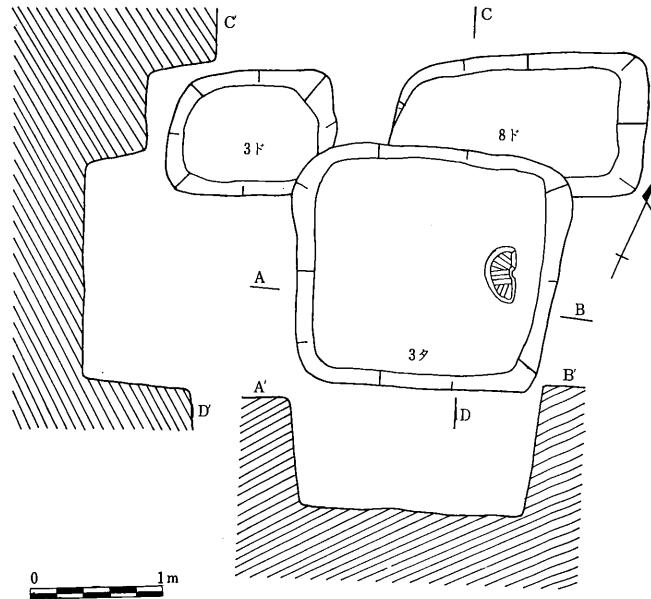
平面プランは長円形を呈し、規模は長・短軸がそれぞれ130×102cm、深さ40cmを計り、覆土中に18×15cm前後の石が5ヶ入っている。

礫混入の茶褐色土を掘り込み、覆土は砂質の暗茶色をしており、床面の東側に中段があり浅くなっている。床面は全体に砂質の小礫混りで、ごつごつしており、浅い方の床面には凹凸がある。壁はやや外傾し、壁面には小礫が混入している。

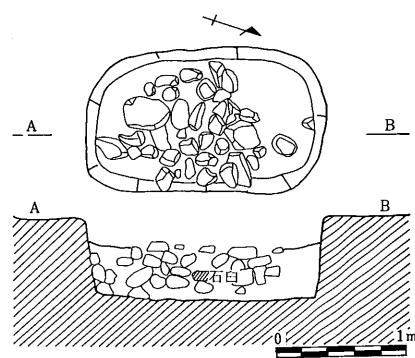
中世の土塙墓と考えられる。

第3号集石土塙（第10図、図版5）

L13~14、M13~14の4グリットにまたがつて発見された集石土塙であり、西側にある第4号集石土塙を切っている。



第8図 第3号竪穴・第3・8号土塙実測図



第9図 第1号集石土塙実測図

平面プランは不整な長方形を呈し、規模は長・短軸がそれぞれ200cm 170cm、深さ68cmを計るかなり大規模の土塙である。礫混りの茶褐色土の基盤を掘り込んであり、覆土は暗褐色土。この覆土を掘り進めて行くと、検出面から約10~15cm下面に、礫を含む砂質黃褐色土混入黒色土層の覆土が、又東側はその下層に礫混入黒色土層となる。西側で4号集石土塙を切っている。

覆土中の礫はコブシ大のものから、人頭大、それ以上のものまでが入っており、北東の隅に、平板な大きな石が覆土上層、検出面直下にある。

壁は西壁が直立又は袋状となるが、他は外傾しており、床面はローム層、割合平坦、固くしまっている。又西壁ぎわの床面には浅いビットがあった。

中の土塙墓と考えられる遺構である。

第4号集石土塙（第12図、図版5）

L14のグリットから発見され、第3号集石土塙の西側にあり、一部第3号集石土層に切られる。

平面プランは長円形に近い形を呈しており、規模は長・短軸がそれぞれ160×130cm、深さ15cmを計る。土塙内には25×15cm前後の石が中央部を覆っており、浅めの土塙である。覆土は砂質の黒褐色土で、砂混りの茶褐色土を掘り込んでいる。

壁はやや外傾し、床面はやや固めであるが、若干の凹凸がみられる。

第5号集石土塙（第13図、図版2,5）

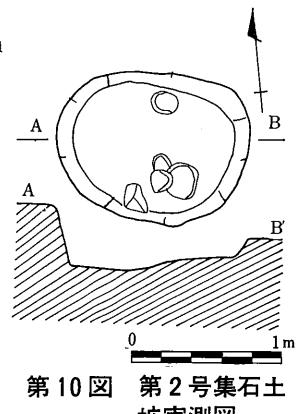
H8~10, I8~9の5グリットにまたがって発見された集石土塙である。

平面プランは長方形を呈し、規模は長・短軸がそれぞれ232×120cm、深さ60cmを計る。

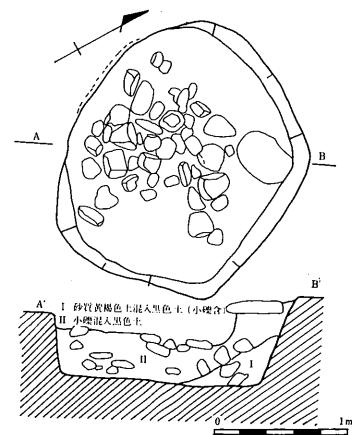
黒褐色土の覆土を掘り進めると、検出面から16cm前後下から礫混入の暗褐色土の覆土となり、これが床面上15cm位まで続く。それより下層、床面までは、黒色土の覆土である。礫はコブシ大のものから人頭大、それ以上のものが多量にはいっており、また木炭粒を多く含んでいた。

壁は外傾し、床面は砂礫層で凹凸がある。壁中にも礫を含んでいる。中世の土塙墓であろう。

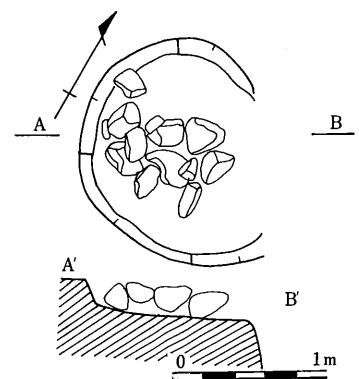
(田畠辰雄)



第10図 第2号集石土塙実測図



第11図 第3号集石土塙実測図



第12図 第4号集石土塙実測図

第4節 土 坡

第1号土坡（第4図、図版2）

L6, M6 の2グリットにまたがり、第1号住居址の南側から発見された土坡である。

平面プランは長方形を呈しており、規模は長・短軸がそれぞれ 202×157cm、深さ 65cm を計る。

小礫混入の暗茶褐色土を基盤として掘り込んでおり、覆土は黒茶褐色が上層、下層にゆくにしたがって黒色土が強くなり、砂礫が混入する。

壁は西壁は直立しているが、他の壁は外傾しており、壁面にはいくらかの砂礫が混入している。床面も礫が少量混入してはいるが、固く、平坦なものであった。

第1号住居址を切る中世の土坡である。

第2号土坡（第14図、図版5）

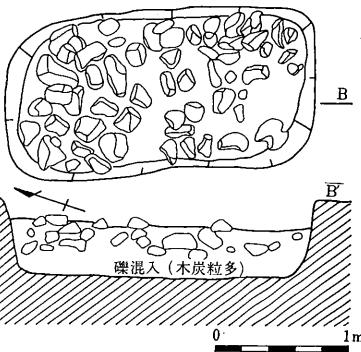
J11~12, K11~12 の4グリットにまたがって発見され、第2号住居址の東側に位置している。

平面プランは不整な長円形を呈しており、規模は長・短軸がそれぞれ 165×95cm、深さ 26cm を計る。

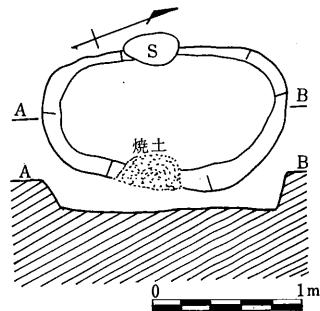
砂礫混りの茶褐色を基盤として掘り込んでおり、覆土は砂質の黒褐色土、西壁上に 36×22cm 大の平板な石が置かれてあり、東壁上部は厚さが 6~8cm 位で焼土が堆積していた。

壁は外傾しており、床面は若干の凹凸があり軟弱であった。

中世の墓塚と考えられる。



第13図 第5号集石土坡実測図



第14図 第2号土坡実測図

第3号土坡（第8図、図版4）

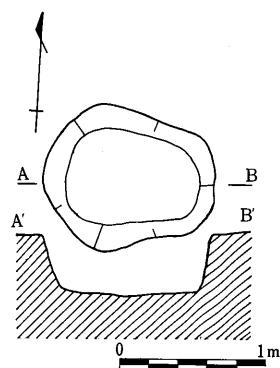
G4 のグリットから発見され、第3号竪穴の西側に位置し、これに切られる土坡である。

平面プランは長方形を呈し、規模は長・短軸がそれぞれ 112×95cm、深さ 50cm を計る。

礫混入の茶褐色土を掘り込んでおり、覆土は砂質黒褐色土、下層は黒色土が強くなり小礫が混入する。

壁はやや外傾しており、その壁面には小礫が入っており、そのために、凹凸のある壁面となっている。床面も小礫が混入しており、凹凸がいくらかある。

中世の墓塚であろう。



第15図 第4号土坡実測図

第4号土塙（第15図、図版5）

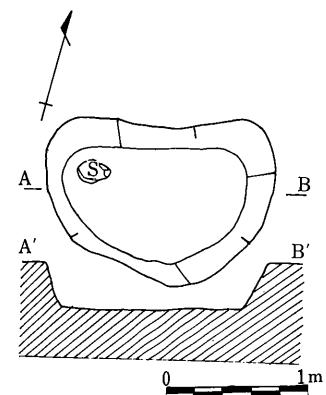
M8のグリットから発見された土塙である。

平面プランは不整な長円形を呈しており、規模は長・短軸がそれぞれ $118 \times 86\text{cm}$ 、深さ 38cm を計る。

礫が混る茶褐色土層を基盤として掘り込んでおり、覆土は暗黒褐色土をしている。

土塙の西側がやや張り出し、半分くらいからふくらみをもっており、壁は、東壁はほぼ直立しているが、ふくらむあたりから西側の壁は外傾している。また床面は若干の凹凸がみられ、西側より東側に行くにしたがって、やや深くなっている。

中世の墓塙と思われる。



第16図 第5号土塙実測図

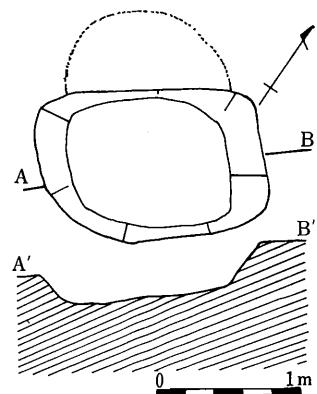
第5号土塙（第16図、図版6）

L9, M9の2グリットにまたがって発見された土塙である。

平面プランは長方形を呈し、規模は長・短軸がそれぞれ $160 \times 114\text{cm}$ 、深さ 30cm を計る。覆土は砂質黒褐色土で、礫混入の茶褐色土を掘り込んでいる。西壁のきわに人頭大の石が覆土中にある。

壁はやや外傾し、床面はほぼ平坦である。

中世の墓塙であろう。



第17図 第6号土塙実測図

第6号土塙（第17図、図版6）

H6のグリットから発見され、長方形の平面プランを呈する土塙である。規模は長い短軸が $156 \times 104\text{cm}$ 、深さ約 32cm を計る。

礫混入の茶褐色土を掘り込み、覆土は砂質黒褐色土、集石等はなく、壁は外傾、床面は若干の凹凸がある。中世の墓塙であろう。

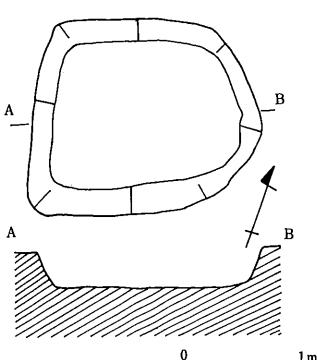
第7号土塙（第18図、図版6）

M, N9~10のグリットから発見され、不整な方形を呈するプランで、規模は $188 \times 162\text{cm}$ 、深さ 28cm を計り、覆土は砂質の暗黒褐色土。壁は外傾し、床面はほぼ平坦。中世の土塙である。

第8号土塙（第8図、図版4）

H3~4, I4の3グリットにまたがり、長方形の平面プランを呈し規模は $187 \times 110\text{cm}$ 、深さ 50cm 。砂質黒褐色土の覆土で、3号竪穴に切られる。壁は東壁は外傾するか、他は直立しており、床面は平坦。中世の墓塙と考えられる遺構である。

（田畠辰雄）



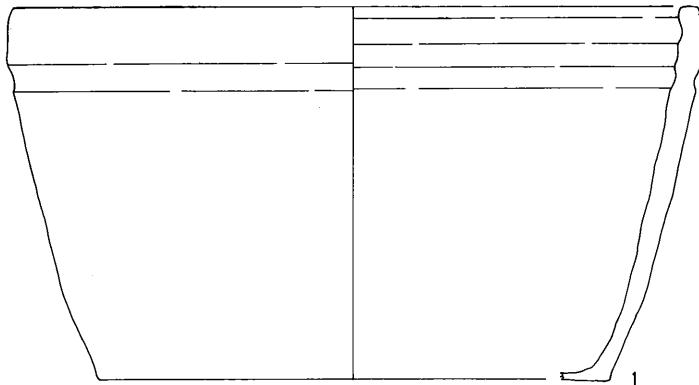
第18図 第7号土塙実測図

第III章 遺 物

第1節 土 器

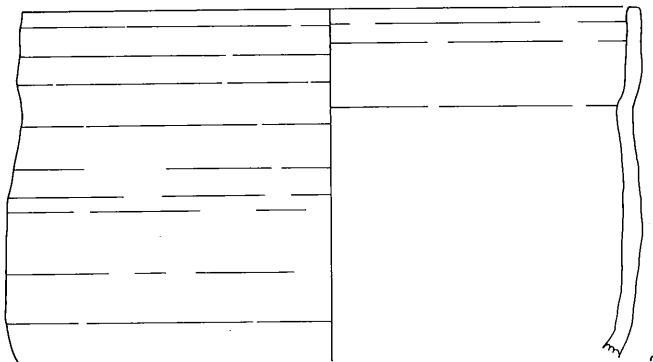
第1号住居址（第19図）

1は、第1号住居址の炉として使用された内耳土器である。ほぼ完型に近いが、底部を欠損しており、耳はもたない。内面の上半は二次焼成痕が顕著である。口径30.0cm、底径22.4cm、器高は16.4cmを計る。内面の口縁部近くは水引き痕がはっきりみえる。この他に内耳片、中世陶磁器片などが出土している。



第2号住居址

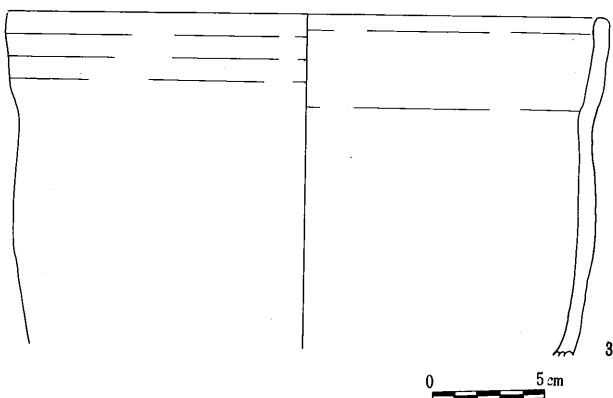
図示はしていないが、内耳土器の胴部破片が数点、中世陶磁器片がわずか出土している。ほとんどが覆土中の出土である。



豊穴（第20・21図）

第1号豊穴からは、内耳土器の破片が数点出土しているが、図示はしていない。他には出土しておらず、遺物量は少なかつた。

第20図-8は第2号豊穴から出土した天目茶碗である。胴部以下を欠損する破片であるが、内・外面ともにこげ茶色を呈し口径は13.4cmを計り、口縁部

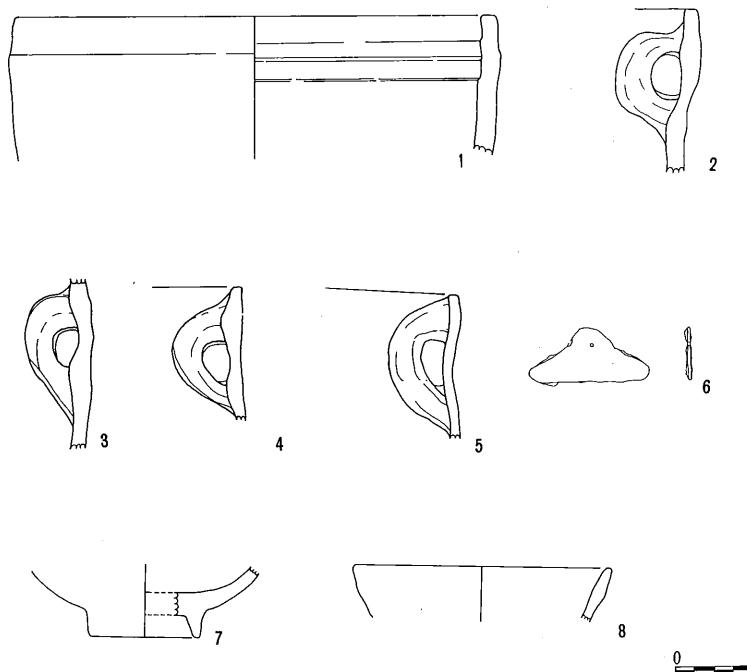


第19図 第1号住居址、第4号集石土塙出土土器

下にふくらみをもつてい
る。

第20図-7は第3号
竪穴出土の青磁の碗であ
り、内・外面ともに淡青
色を呈しており、龍泉諸
窯のものらしい。底部の
みで、口縁部を欠損して
いる。底径は5.7cmを
計る。

第21図の石臼は第3
号竪穴の覆土の中層から
出土しており、安山岩質
のもので、約半分を欠損
している。



集石土塙（第19・20
図、図版）

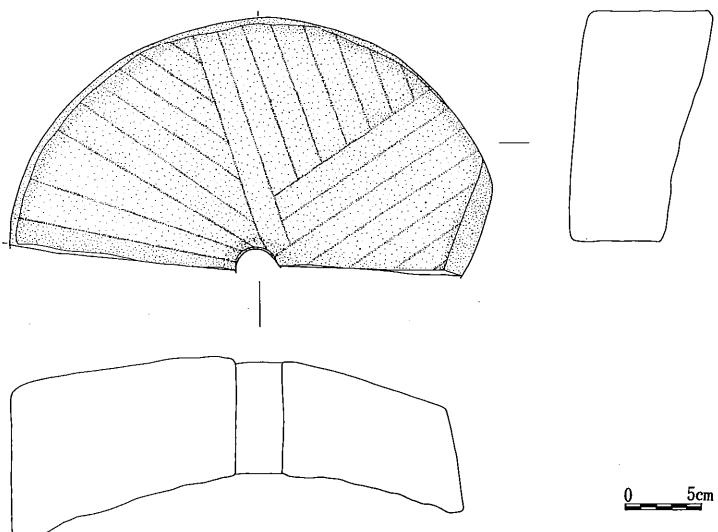
第20図-5は第1号集石
土塙より出土している内耳土
器の口縁部であり、口縁ぎり
ぎりから耳がついている。

第20図-1は第2号集石
土塙より出土している内耳土
器であり、胴部以下、底部を
欠損している。内面の水引が
顕著である。口径は25.1cm
を計る。

第20図-2は第3号集石
土塙より出土している内耳土
器片であり、口縁から約7
mm下から耳がついている。

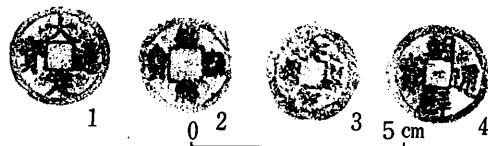
第20図-3は第4号集石
土塙より出土している内耳土
器片である。口縁より下から
耳がついている。第19図-2

第20図 竪穴・集石土塙・土塙出土・土器・陶磁器・鉄器



第21図 第3号竪穴出土石臼

・3も第4号集石土括から出土しており、2は口縁部が胴部に比して広くなっている。口径は27.1cmを計る。3も2と同様に口縁部が胴部より広くなり口径は26.5cmを計る。ともに口縁から底部までの破片である。



第22図 古銭

土括（第20図、図版）

土括より出している遺物は少なく、ここで図示したものは1点である。第20図-4は第1号土括より出土している内耳土器片で、口縁直下から耳が出ている。

他の出土遺物で主だったものをあげると、第2号集石土括より常滑片、第2号住居址から砥石、第1号集石土括からは凹石、などが出土している。

(田畠辰雄)

第2節 鉄器・古銭

第20図-6は第2号住居址の床面近くから出土した火打金具である。把手部に穴があいており、ほぼ完全な姿で出土している。

古銭は全部で4枚出土しており（第22図-1～4）、1は「大定通宝」、2は「?通宝」、3は不明、4は「朝鮮通宝」である。

1は第5号集石土括より、2は第5号土括より、4は第3号竪穴より出土しており、3はグリットより出土している。

(田畠辰雄)

第IV章 まとめ

上原遺跡から発見された遺構は、すべて中世の時代の遺構と考えられているものばかりであった。附近には、中原跡遺等が存在している。

本遺跡の地層は砂礫混りの層が厚く堆積しており、かなり混乱している層序であった。

縄文時代の遺跡として確認されていた遺跡であるが、地元住民によって本遺跡附近から、灰釉陶器の壺・皿等の破片が表採されている。

今回の調査地区からは、中世の住居址2軒、同じく竪穴3基、それと集石土拡5基、土拡8基が検出され、これら土拡の中には、遺物等がまったくなく、時期不詳のものもあるが、遺物の出土している他の土拡と形狀が類似しており、すべて中世の時期のものと考えた。

第1号住居址はプランこそ確認は出来なかったが、炉址の形態は、内耳土器を地中に埋めて炉とする。いわば埋甕炉の形態をとっており、注目される住居址である。第2号住居址は、胴張り方形のプラン・地床炉をもち、壁高は高いが、一般的にみられる中世の住居址である。

竪穴は3基検出され、すべて地下貯蔵庫の形態をもっており、地下倉址と考えた。深さは、第1・2号竪穴が70cm前後、第3号竪穴は102cmを計る。

伊那市西春近山本部落の西方、城平遺跡から同様の中世地下倉址が検出されているが、この遺跡の地下倉は、床面に柱礎と考えられる石かまたは柱穴をうがってあるが本遺跡の地下倉は、そのような床面施設は認められなかった。また城平遺跡では、窖址と呼ぶ、円形プランを呈し、プランの外側に柱穴を持ち、断面袋状をなす遺構があるが、これに該当する遺構は本遺跡では発見されなかった。

土拡は合計13基検出されたが、このうち集石をもつ土拡が5基確認された。これらの集石をもつ土拡は、すべて長方形か、それに近い平面プランを呈し、礫もぎっしり一面に入っているものとそうでないもののとの2種類がある。その集石も覆土の中層に雑然とつまっているものが多く、第1号集石土拡の集石中には石臼のこわれたものも含まれていた。

集石を持たない土拡も、ほぼこれに近い形狀を呈しているが、その造りは、集石を持つ土拡より雑であるようにみうけられた。これらの2種類の土拡は、その形狀等からみて墓拡であろうと考えた。

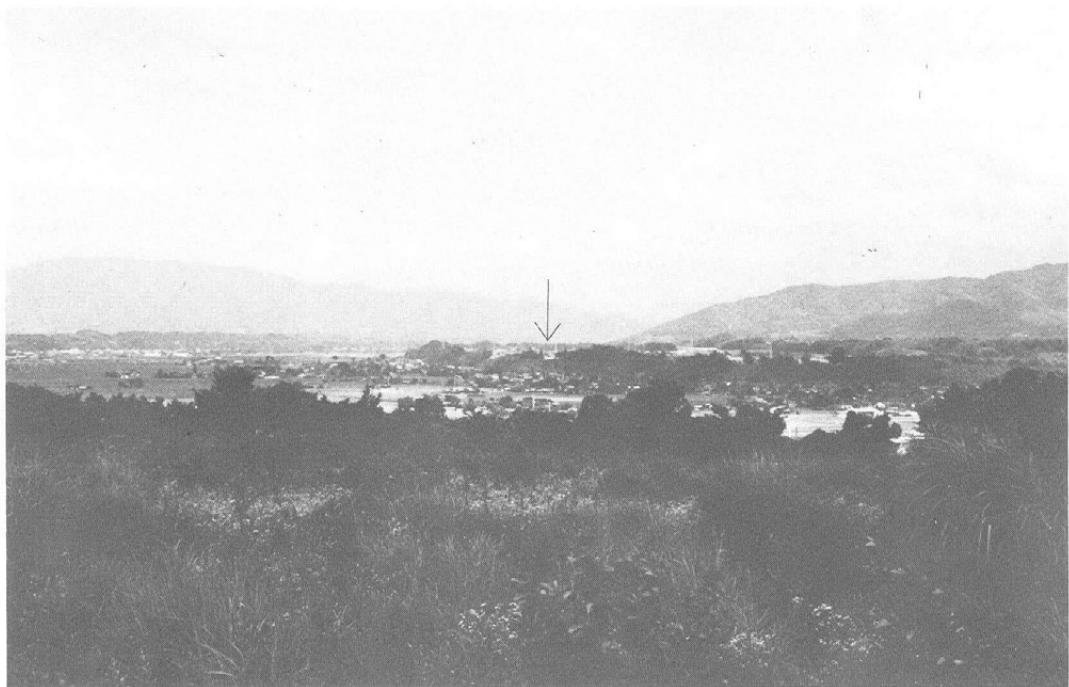
出土遺物は、内耳鍋、青磁の壺、天目茶壺、常滑等の陶磁器片、火打金具、石臼、古銭などが出土している。

古銭は第5号集石土拡より「大定通宝」が第3号竪穴より「朝鮮通宝」が出土、第5号土拡と、グリット出土の古銭は文字不詳であった。「大定通宝」は南宋銭で、鋳造された年は、1161～1189年、「朝鮮通宝」は1423年～1424年に鋳造されている。

第1号、2号、3号竪穴は、第1号及び第2号住居址とにそれぞれ関連する遺構であろうと考えられるが、どの竪穴が、どの住居址に付属する遺構であるかという判断はできなかった。

(田畠辰雄)

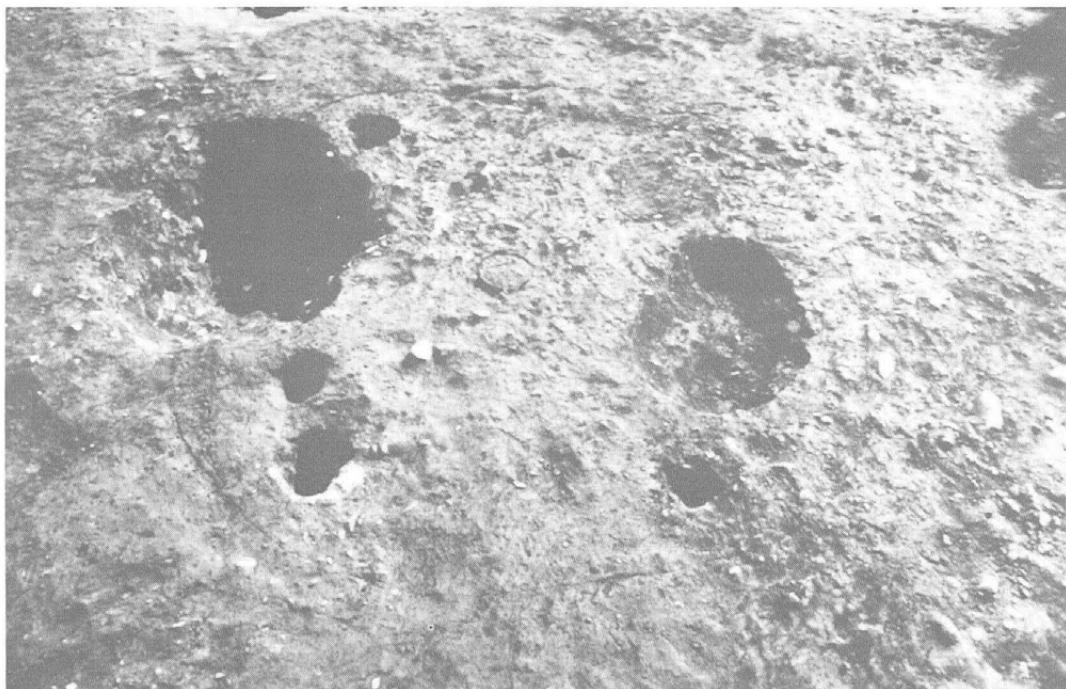
図 版



遺跡地を竜西地区より眺む



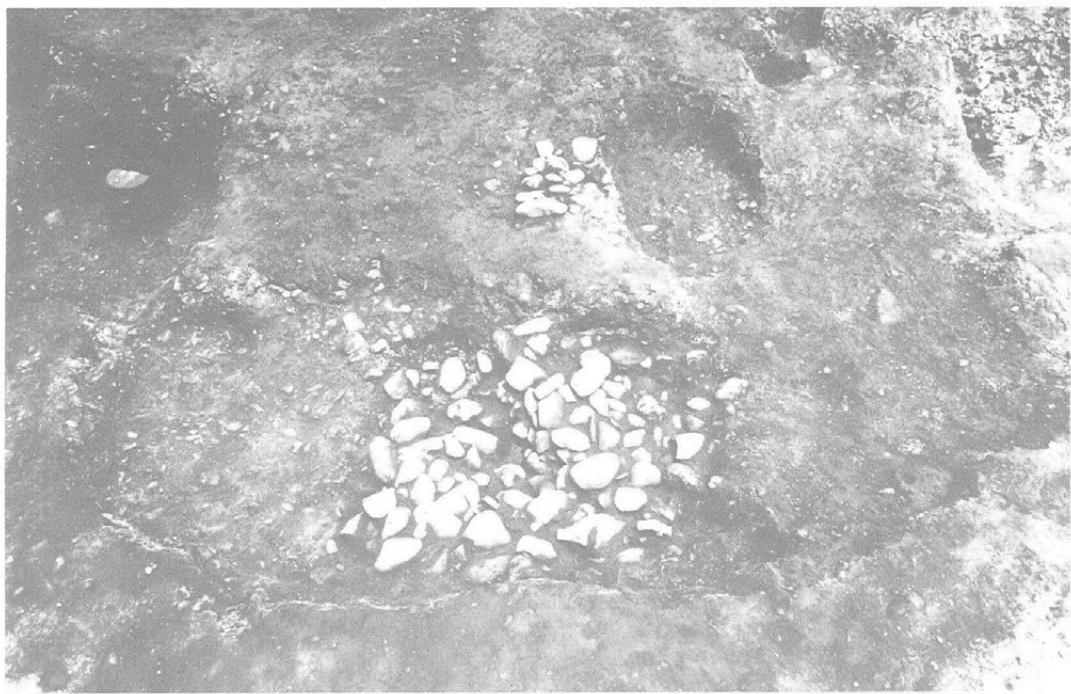
遺跡地を南側より眺む



第1号住居址及び第1号土拵



第2号住居址及び第2号集石土拵



第1号竪穴



第2号竪穴及び第5号集石



第3号竪穴及び第3・8号土拠



第1号集石土拠

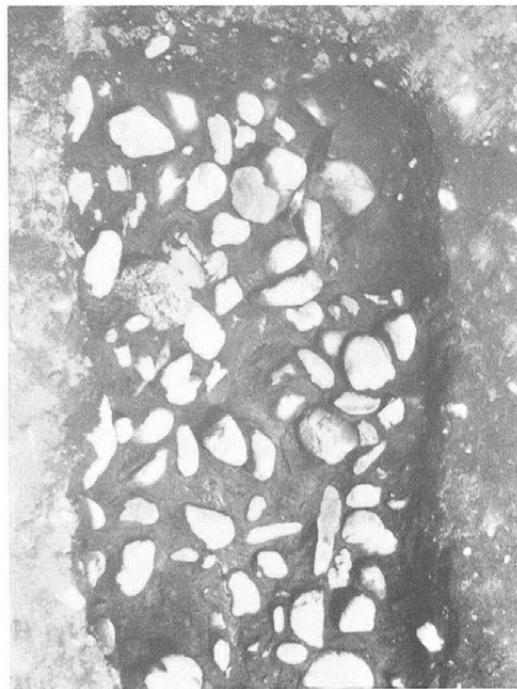


第2号集石土拠

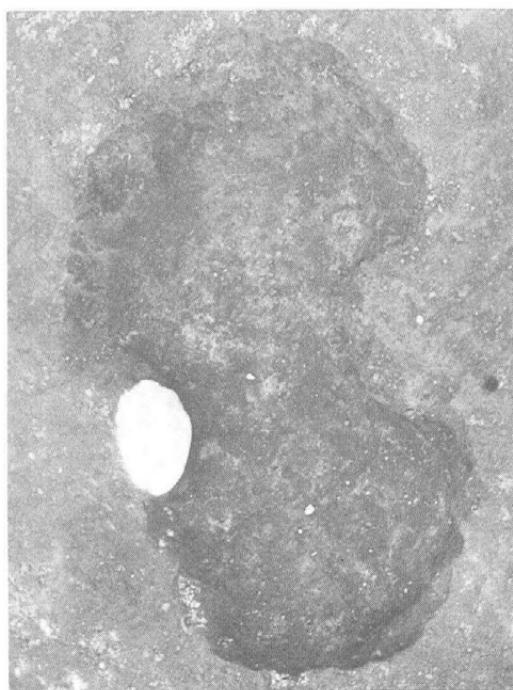
図版4 遺構



第3・4号集石土拡



第5号集石土拡



第2号土拡



第4号土拡



第5号土拠



第6号土拠



第7号土拠



第1号住居址炉



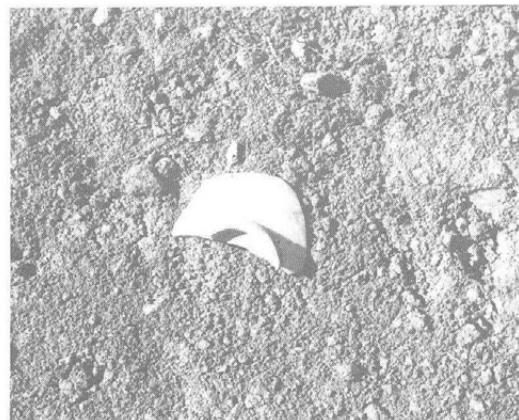
第1号住居址炉址断面



第2号住居址集石



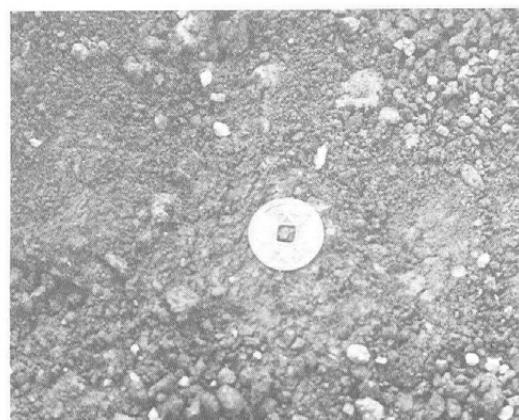
石臼出土状況



青磁出土状況



内耳出土状況



古銭出土状況

図版7 遺構及び遺物出土状況

上原遺跡緊急発掘調査報告書

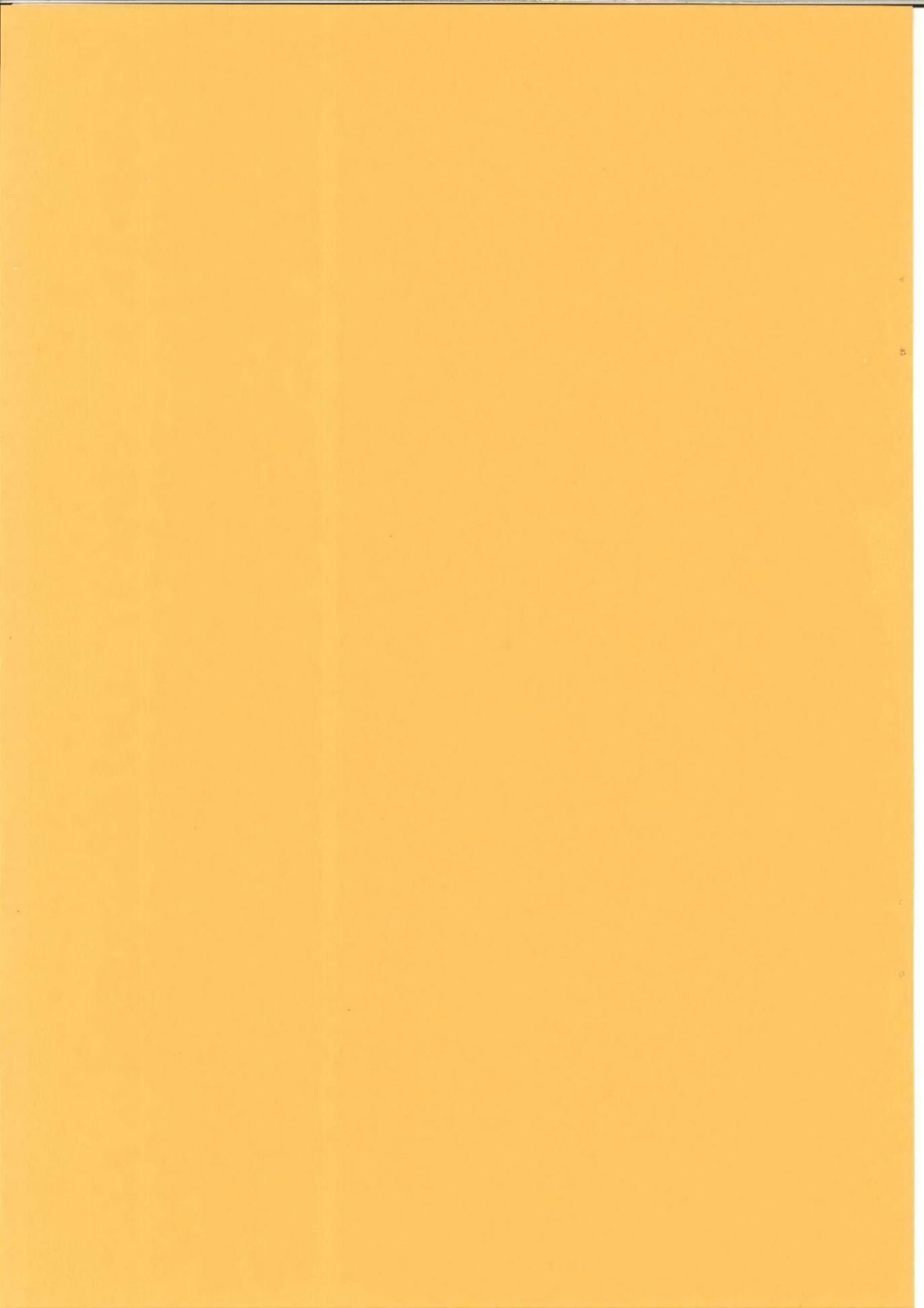
昭和 52 年 3 月 15 日 印刷

昭和 52 年 3 月 18 日 発行

発行者 伊那市教育委員会

印刷所 岡谷市川岸 108
中央印刷株式会社

根木谷中畠遺跡



目 次

目 次.....	3
挿図目次.....	4
図版目次.....	4
第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	5 ~ 7
第1節 発掘調査の経緯.....	5
第2節 調査の組織.....	5 ~ 6
第3節 発掘日誌.....	6 ~ 7
第Ⅱ章 遺 構.....	8 ~ 13
第1節 住居址.....	8 ~ 13
第2節 土 坂.....	13
第Ⅲ章 遺 物.....	14 ~ 20
第1節 土 器.....	14 ~ 20
第2節 石 器.....	20
第3節 鉄 器.....	20
第Ⅳ章 ま と め.....	21

挿 図 目 次

第1図 遺構配置図	8
第2図 第1号住居址実測図	9
第3図 第1号住居址カマド断面図	9
第4図 第2・3号住居址実測図	10
第5図 第2・3号住居址カマド断面図	10
第6図 第4号住居址実測図	11
第7図 第4号住居址カマド断面図	11
第8図 第6号住居址実測図	12
第9図 第1号土塗実測図	13
第10図 遺物実測図	15
第11図 遺物実測図	16
第12図 遺物実測図	17
第13図 遺物実測図	20

図 版 目 次

図版1 遺跡全景
図版2 遺構
図版3 遺構
図版4 遺構
図版5 遺構及び遺物出土状況

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

富県地区の県営圃場整備事業は、昭和48年度、桜井地区に於いて最初に着手され、昭和49年度には貝沼地区で行なわれました。幸いにも、両地区には指定された遺跡は存在しませんでした。昭和51年の事業地区には根木谷中畑遺跡が該当しましたので、工事着工以前に調査にかかる運びとなりました。発掘調査地区は水田地帯であったが、夏場施行であったために、収穫等の問題でトラブルが多く調査は割合に順調に行なわれ、着手は8月上旬頃から実施されました。根木谷中畑遺跡の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より市教育委員会へ連絡があり、おいて南信土地改良事務所より、緊急発掘調査について委託した旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市教育委員会を中心にして、根木谷中畑遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

南信土地改良事務所長と市長との間で、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節 調査の組織

根木谷中畑遺跡調査会

○調査委員会

委員長	松沢 一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井 喜夫	伊那市教育委員長
"	向山 雅重	長野県文化財専門委員
"	木下 衛	上伊那教育会会长
"	原 益久	南信土地改良事務所長
"	辰野 伝衛	伊那市文化財審議委員
調査事務局	竹松 英夫	伊那市教育委員会社会教育課長
"	有賀 武	" 課長補佐
"	白石 利彦	" 係長
"	三沢真知子	" 書記

○発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会员
"	御子柴泰正	"

調査員	小池 政美	長野県考古学会会員
"	田畠 辰雄	"
"	福沢 幸一	"
"	辰野 伝衛	"
"	赤羽 義洋	国学院大学学生
"	荻原 茂	東京薬科大学学生

第3節 発掘日誌

昭和51年8月3日 発掘器材を前発掘地区東春近共栄地区の現場より、富県南福地根木谷地区まで午前中一杯を費やして運搬する。昼過ぎ、これらの運搬してきた器材の点検、及びテントの設営を行なう。夕方までに一応完了した。

昭和51年8月4日 本日より、遺跡地区は広大な面積であり、また、予算も限られているので、できるだけ効果をあげるために、ところどころに坪掘状のグリットをあけてみる。

当地は割合に湿気が多いものとみて、水田面の耕土を掘り下げてみると、その下より水がわき出てくるような状態であった。遺物の出土は何もなかった。

昭和51年8月5日 生活条件からして、こんな湿地にはすまないものと考えて、小高い所へ前日同様グリット状のピットを数カ所にわたって入れるが、遺物の出土は何もなかった。

昭和51年8月6日 遺構検出のグリットを各所にわたっていれる。遺物の出土は何もなかった。

昭和51年8月7日 遺構検出用のグリットを各所にわたっていれる。遺物の出土は何もなし。

昭和51年8月9日

遺構検出用のグリット
を各所にわたっていれ
るが遺物の出土は何も
なかった。

昭和51年8月10日
遺構検出用のグリット
を各所にわたっていれ
るが遺物の出土は何も
なかった。

昭和51年8月11日
遺物出土の場所は大般
察知できたので、本日
は遺構の期待できそ
うな場所へブルトーザー
を入れることにした。



発掘風景

昭和 51 年 8 月 12 日 本日より、本格的な調査にとりかかる。まず、第一に問題となるのはグリットの設定である。南北 1~15、東西 A~L の名称をつけ、一辺を $2m \times 2m$ として、 $4m^2$ のグリットを 180 個設ける。

昭和 51 年 8 月 17 日 本日より本格的なグリット掘りに着手し、発掘方法は南側より北側へ、全面的に掘り進めていくことにした。本日の段階では遺物はかなりの量が出土したが、決め手になる遺構は発見されなかった。

昭和 51 年 8 月 18 日 昨日に引き続いて、グリット掘りを進めていくと、G5 附近に落ち込みがみられ、これを第 1 号住居址とする。第 1 号住居址を掘り進めて精査を加えていくと、住居址の中央部附近に丸い土塙状の落ち込みがみられ、これを第 1 号土塙とする。

昭和 51 年 8 月 19 日 本住居址、すなわち第 1 号住居址と第 2 号土塙の完掘を終了して、グリット掘りをさらに、北へ、北へと進めていく。すると、北側にかたい床面が発見され、これを第 2 号住居址とする。第 2 号住居址の精査をすすめていくと、第 2 号住居址のところにもう一軒、住居址が発見され、これを第 3 号住居址とする。

昭和 51 年 8 月 20 日 第 2 号住居址と第 3 号住居址の完掘を終える。完掘のための最終段階に於いて、第 2 号住居址の西側にさらにもう一軒、住居址が発見され、第 3 号住居址とする。

昭和 51 年 8 月 21 日 第 3 号住居址のプラン確認と全面発掘をする。夕方までには一応、プラン確認だけは終了する。

昭和 51 年 8 月 23 日 第 3 号住居址の完掘をする。

昭和 51 年 8 月 24 日 グリット掘りをさらに北側へと進めていくと、L10, F11 に二軒の住居址が発見され、前者を第 5 号住居址、後者を第 6 号住居址として、その全体をつかむことに精力を注ぎ込み、大部分、こわされてしまっていたので、夕方までに両住居址とも掘りあがってしまう。

昭和 51 年 8 月 25 日 第 1 号住居址から第 6 号住居址まで写真撮影を終える。

昭和 51 年 8 月 26 日 第 1 号住居址から第 6 号住居址までの実測図作製および全測図の作製をする。

昭和 51 年 8 月 27 日 発掘器材のあとかたづけやテントのとりこわしをする。

昭和 51 年 8 月 28 日 昨日、一杯でかたづけられなかった器材のあとかたづけをして一応、現場での発掘を終了とする。

昭和 52 年 1 月 報告書作製に必要な図面の整理及び作製図版の整理及び作製をする。

昭和 52 年 2 月 報告書の編集と同書を印刷所へ送る

(小池政美)

第II章 遺構

第1節 住居址

第1号住居址（第2図、図版2）

F4~7, G5~7, H5~6 の9グリットにまたがって発見された竪穴住居址である。

隅丸方形の平面プランを呈し、規模は長短軸がそれぞれ3m90cm×3m66cm、壁高は22~26cmを計る。本址はローム層を基盤として、黒褐色土が覆土として落込んでいる。

カマドは北壁の中央部に位置しており、その形状は石組粘土カマドと思われるが、石組は抜かれしており、残ってはいない。壁を切り込んで構築されており、焼土も8cm前後に堆積している。

柱穴はさだかでなく北壁の西隅に浅いピット（P₁57×30cm）が、東壁南寄りに壁を切って（P₂34×32cm）が2ヶ検出されたが、壁外柱穴等は確認出来なかった。又P₂は本址に付属する遺構と思われ、貯蔵用のものと考えたい（57×30cm、深さ58cm）。なお、本址の南側の張出しが、本址を切る土塙であり、このため南壁はかなり確認がむずかしかった。

床面の状態は、周囲を残して良好で、貼床部ではあるが、固い叩きの、ほとんど平坦な床、周囲は軟弱である。壁は外傾し良好である。

なお中央の貼床部をはがしたところから土塙が一基発見された（1号土塙）。

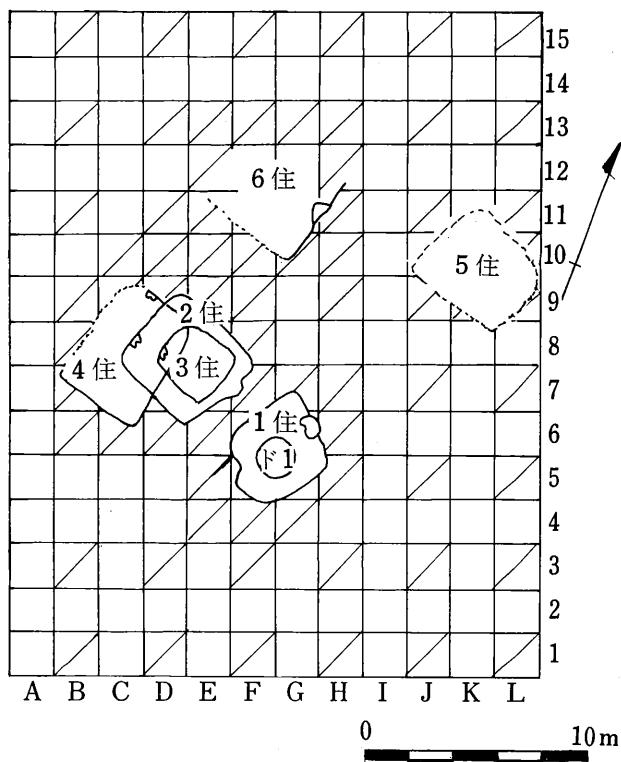
本址出土の遺物は後章で説明するが土師器の甕、杯、須恵器の甕、杯・灰釉陶器の椀などが出土地しておらず、これらの出土品より平安時代も前半の住居址である。

第2号住居址（第4図、図版2）

C7~8, D6~9, E6~9, F7~8 の12グリットにまたがって発見された竪穴住居址である。

方形プランを呈し、規模は長短軸がそれぞれ4m70cm×4m67cm、壁高は18~25cmを計る。

本址は軟質ロームに黒褐色土の覆土が落込んでおり、覆土の下層は、上層よりも黒色が強い黒褐色であった。本



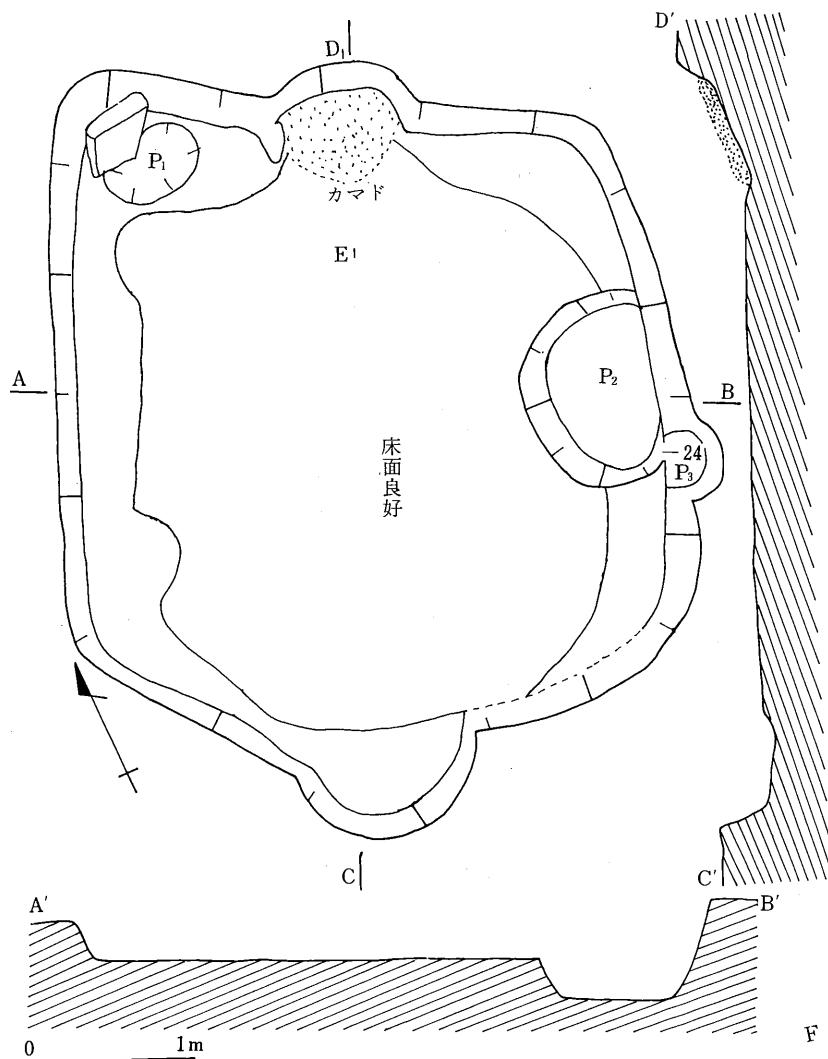
第1図 遺構配置図

址の覆土上には、コブシ大から、小児人頭大位までの石の集石がみられた。これは水田造成時に集められ置かれたものであった。

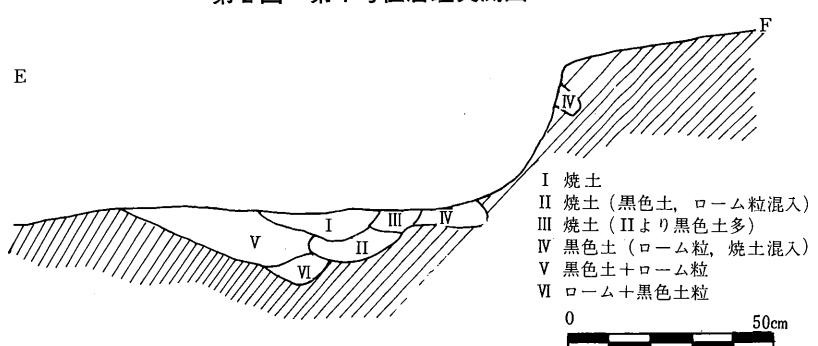
3号住居址を貼床してあり、カマドの位置は西壁の南寄りに、石組粘土カマドが構築されてあるが、ほとんどくずれており原形はとどめていない。3号住居址のカマドとほとんど続いているが、焼土の堆積は床面下およそ20cmまでもおよんでいる。西壁内に構築されているようで、壁を切って構築された様子はみられなかつた。

床面は、固く平坦な叩きの床であり、3号住居址上は貼床してあるが、黒色土とローム混りの固い叩きの床でこの部分は若干他の床に比べ下っていた。

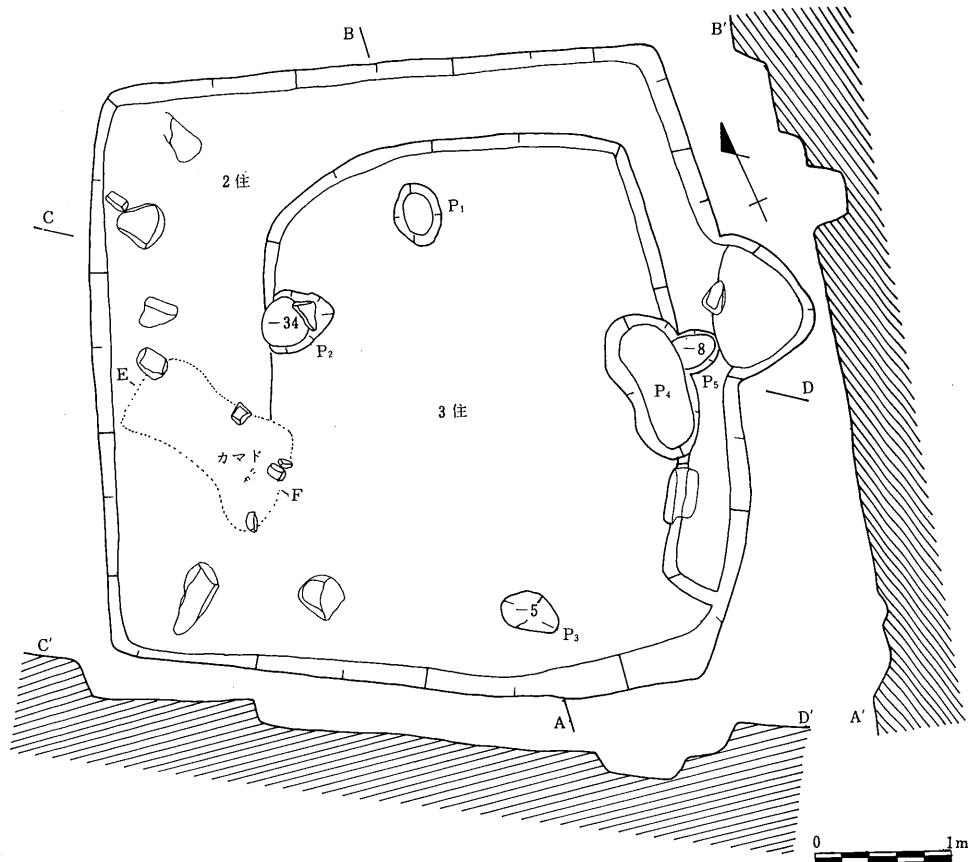
東壁にある張出した部分は本址を切る土塙



第2図 第1号住居址実測図



第3図 第1号住居址カマド断面図



第4図 第2, 3号住居址実測図

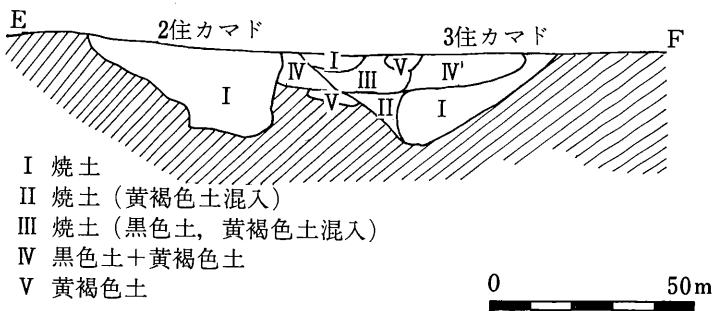
であり、97×75cm、深さ25cmを計る。壁は直立している。

本址は出土遺物からみて平安時代前半の住居址である。

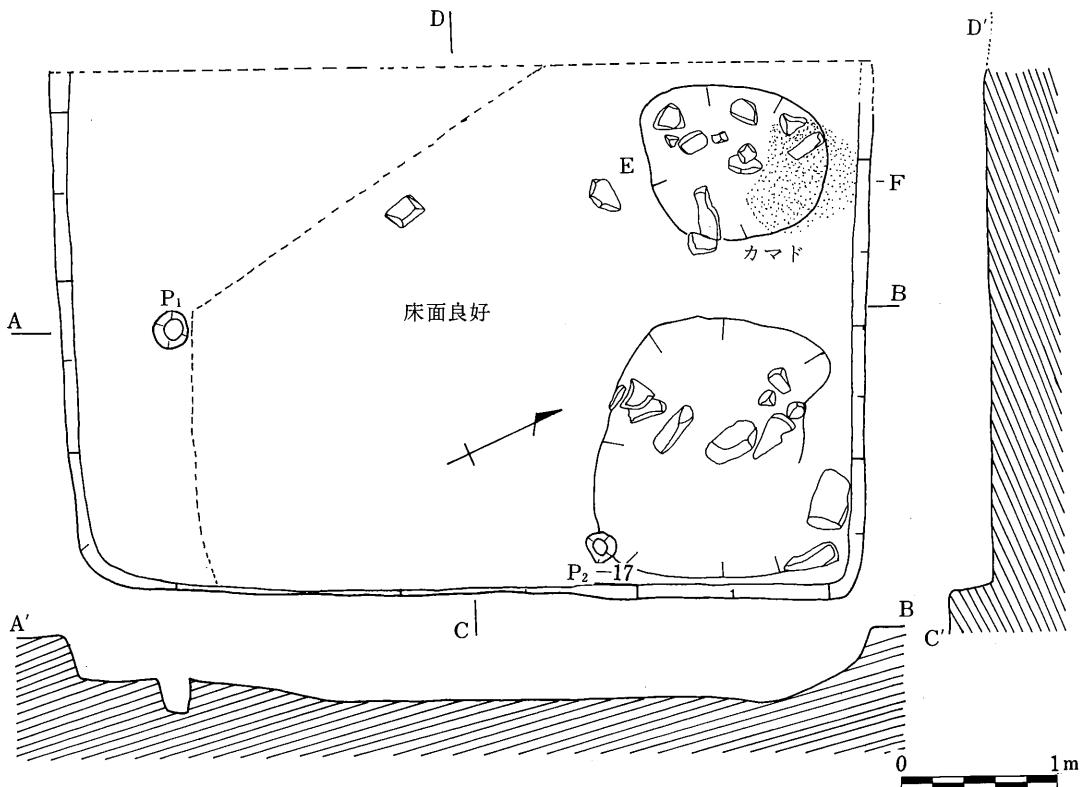
第3号住居址（第4図、図版2）

D7~8, E7~8, F7~8 の6グリットにわたって発見された竪穴住居址である。

隅丸方形のプランを呈し、規模は?×3m10cm、壁高は約17cmを計り、2号住居址に貼床されている。黒色土+ロームの貼床をはずすと、黒色土の落込みがあり、下層はローム混入の黒色土であった。カマドの位置は2号住居址とはほぼ同一の位置で、同様の構築状態であったらしい、かなりの焼土の堆積がみられ、床面下22cmにまでおよんでいる。柱穴は4ヶ認められ、うちP₅は壁



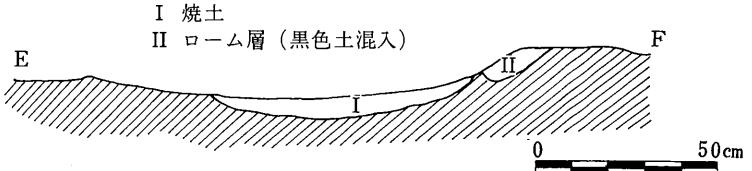
第5図 第2, 3号住居址カマド断面図



第6図 第4号住居址実測図

を切ってある。P₁47×35 cm, 深さ 24cm, P₂54×45cm, 深さ 34cm, P₃45×29cm, 深さ 5cm, P₅30×40cm, 深さ 8cm, また, P₄は本址を切る土塙で 110×48cm, 深さ 42cm を計る。床面は固く良好, 壁は

直立する。カマドの状態等からみると, 本址を拡張して 2 号住居址を構築したものと考えられる。又 2 号, 3 号住居址ともに 4 号住居址上に貼床してある。平安時代の住居址である。



第7図 第4号住居址カマド断面図

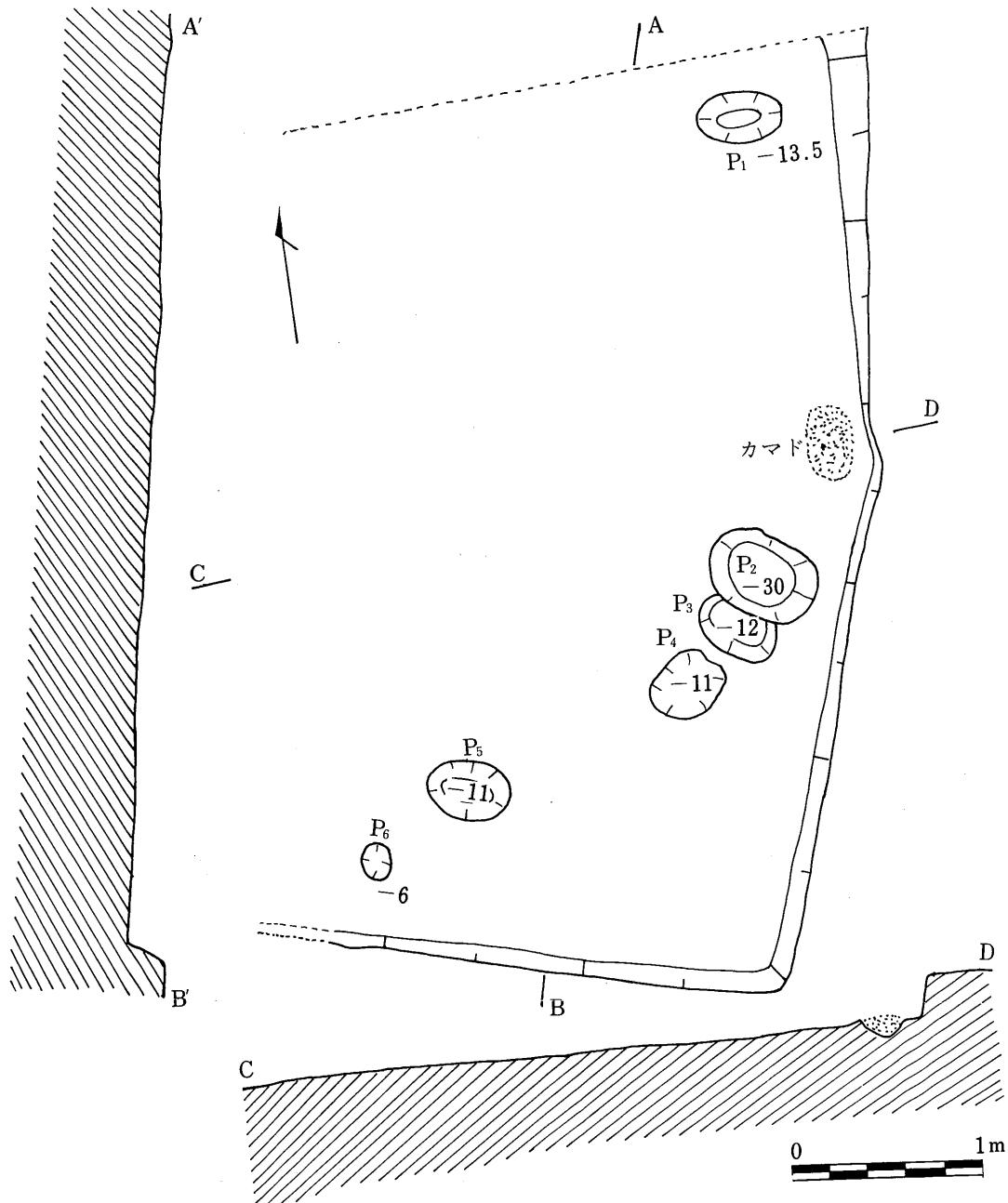
第4号住居址（第6図、図版3）

B7~8, C6~9, D7~9 の 9 グリットにまたがって発見された竪穴住居址である。

長方形のプランを呈し, 規模は 5m16cm × ? cm, 壁高は 25~27cm を計る。ローム層を切り込んで黒褐色土があり, 覆土の下層はローム粒混入の黒色土であった。カマドは北東の隅にあり, 壁内に構築されており, 床面をやや掘りくぼめ, おそらく石組粘土カマドであったものと思われるが,

原形はとどめていない。柱穴は2ヶ確認できただけで、壁外等の柱穴は不明、P₁26×24cm, P₂21×20cm, 深さ17cmを計る。床面は全体の2/3程度は固い叩きの床であるが、他は軟弱で、住居址の両側は水田をつくる時点での破壊されている。

住居址内の北東の隅に、若干凹んだ部分(169cm×125cm)があり、その中に割合平板な石がいくつか入っている。又壁はほぼ直立している。本址は、2号、3号住居址に貼床されている。出土



第8図 第6号住居址実測図

遺物からみて平安時代前半の住居址である。

第5号住居址

本址は、水田の耕作面から約20cm下から発見されたが、床面らしきものは一部分検出されたのみで、壁等は不明であった。床面は一部固い叩きであるが、他は不明、カマド、柱穴等は確認出来なかつた。

第6号住居址（第8図、図版3）

E11～、F10～12、G10～12、H11～のグリットにまたがって発見された竪穴住居址である。

長方形のプランを呈すものと思われるが、北側と西側は水田造成時に破壊されてしまい、残っていない。規模等も不明である。

ローム層に、暗茶褐色が落込んでおり、覆土の下層は褐色土混入の黒褐色土である。

カマドは東壁の中央部に位置しており、壁を切り込む形に構築してある。石組粘土カマドと思われるが、原形はとどめていないので不明である。床面を掘りくぼめてあり、そこにかなりの量の焼土が堆積している。

壁高は残存部分で、20～22cmを計り、ほぼ直立している。

本址は火災にあった住居で、覆土中にかなりの焼土と炭化材、木炭粒が混入しており、それは、覆土の中層に集中していた。また、床面は固い叩きの床で、若干の凹凸がみられるが良好、柱穴状のものは6ヶ検出され、P₁45×27cm深さ13.5cm、P₂59×42cm、深さ30cm、P₃44×?cm、深さ11cm、P₅42×32cm深さ11cm、P₆20×17cm、深さ6cmを計る。出土遺物からみて、平安時代前半の住居址である。
(田畠辰雄)

第2節 土 坡

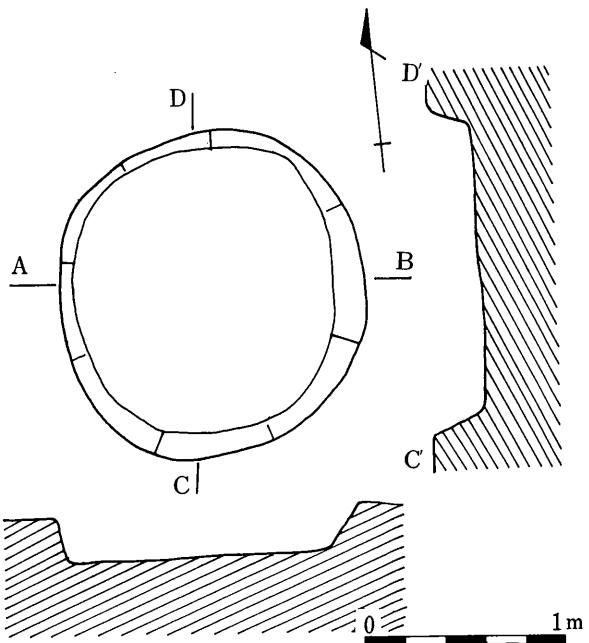
第1号土坡

1号住居址内の貼床下から発見された土坡で、ほぼ円形のプランを呈し、規模は長・短軸がそれぞれ161cm×151cm、深さが約22cmを計る。

ローム層を掘り込んでつくられ、覆土は褐色土が混入する暗茶褐色土である。

床面は、やや軟弱であるが、凹凸はなく中央部がいくぶん高くなつておらず、壁はやや外傾ぎみ、タライ状に近い形態である。遺物は出土していない。

(田畠辰雄)



第9図 第1号土坡実測図

第III章 遺物

第1節 第1号住居址出土土器

土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。量的には、土師器が多く、つづいて須恵器、灰釉陶器は少量伴うだけである。土師器の甕は長胴のものが多い様で、その胴部の整形技法からみると、擦痕のみのもの、ヘラナデをおこなっているもの、くし状の工具による粗いカキ目と極細のカキ目を施すものとがあり、カキ目痕を有するものが一番多く見うけられる。

土師器杯は、内面内黒のものが多く、内面が研磨され、暗文のつくものと、あまり研磨されていないものとが、半々くらいの割合で出土している。須恵器は甕の胴部片と杯が出土、また灰釉陶器は椀が、少量出土している。

土師器甕（第10図（1～4）、第11図（2））

1は、内外面ともに色調は灰褐色を呈し、雲母を少量含む胎土をもち、焼成は良好である。口唇から頸部にかけて、内外面ともに横ナデ整形、頸部下は不明であり、口径20.2cmを計る。長胴になると甕であるとおもわれる。2は1と同様、覆土から出土している甕で、色調は外面が明淡褐色、内面灰黒褐色を呈し、雲母、小石粒を微量ではあるが含んでおり、胎土、焼成とともに良好である。口縁から頸部にかけては内外面ともに横ナデ整形であるが、外面の口唇部の横ナデ痕はかなりはっきりと現われており、内面の口唇近くには浅い2条の沈線がはいっている。

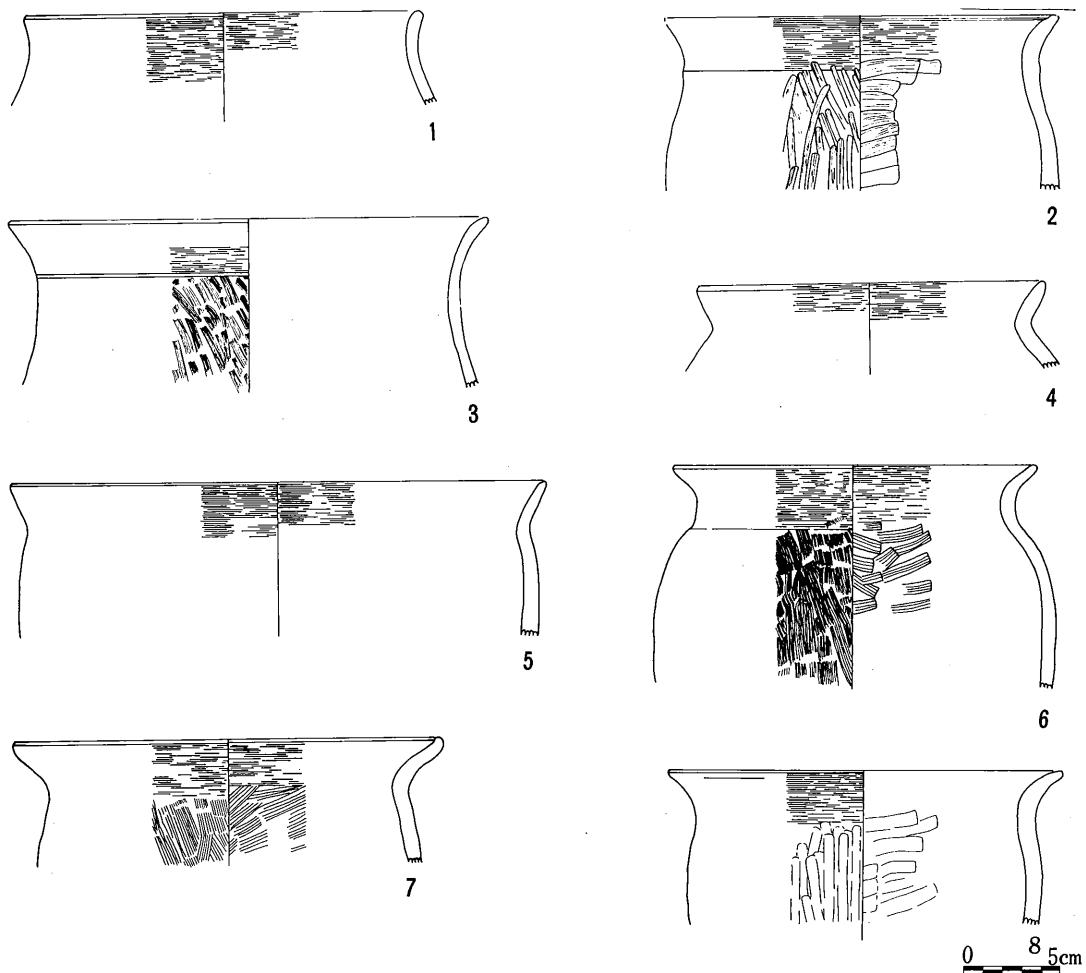
頸部に一条の稜線をもち、頸部以下胴部にかけて、幅細のヘラ状工具による縦方向のナデ整形がおこなわれている。内面は頸部以下胴部にかけて、幅広のヘラ状工具による横方向のナデ整形が、雑におこなわれている。口径19.8cmを計り、肩部下、胴上部に胴最大径がくるものとおもわれる。胴部最大部径は20.2cmを計る。3は覆土出土であり、暗褐色の色調を呈し、雲母を多く含み、かなり砂ぼい胎土で、焼成はやや不良である。整形技法は、外面口縁、中ほどから下部にかけて横ナデ頸部に浅い二条の沈線がはいっている。頸部から胴部にかけては極細の縦方向カキ目痕がはいっている。内面はところどころに擦痕がみえる程度であり、目立った整形はおこなわれていない。口径24.9cmの長胴になる甕と思われる。

4はカマド内より出土、色調は内外面ともに茶褐色を呈し、小石粒多し、雲母を少量含む、かなり砂ぼい胎土で、焼成はやや不良、口唇から口縁部中ほどまで横ナデが、頸部以上胴部は擦痕、内面は、口縁部横ナデ、頸部以下は、器面が荒れていて不明、口径17.6cmを計る。第11図（2）はカマド内出土の甕の底部である。

土師器杯（第11図（1・3））

ここに図示したものは、ともに内面黒色のものである。1は覆土出土、外面の色調は明赤褐色、小石粒が見散される。内面は研磨され、暗文がはいっている。ロクロによる整形痕は、さほど現られておらず、底部は糸切り、底径7.9cmで、口縁を欠損している。3は覆土出土、色調は外面赤褐色、胴部上半で陵をもち、そこから下部にかけて、やや丸味を帶び、口縁は直にのびる。内面は研

磨されておらず、口径 10.3 cm、底部を欠いている。



第10図 遺物実測図

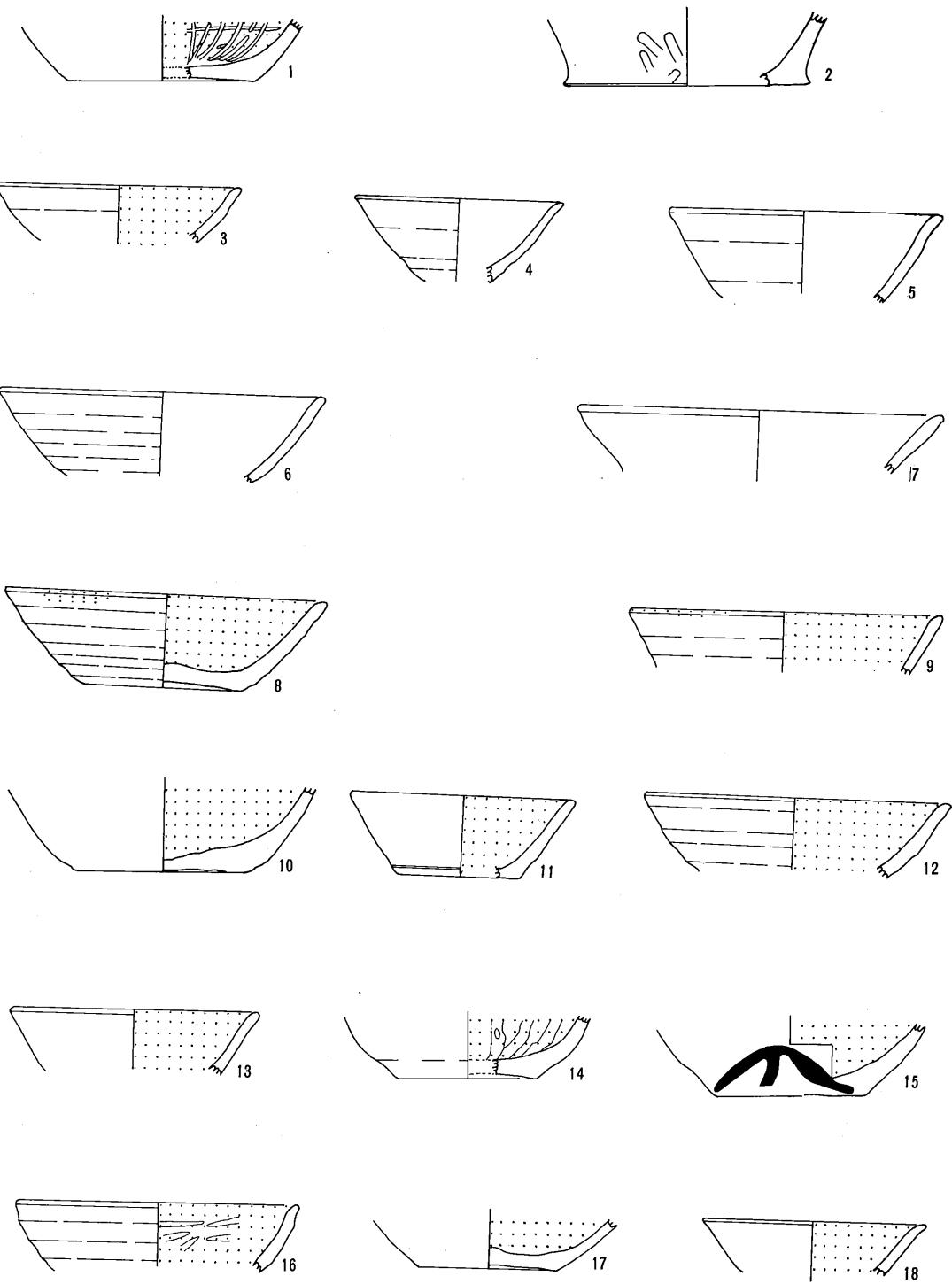
須恵器杯（第12図（5~6））

5は覆土出土、色調は内外面ともに灰白色を呈し、小石粒を微量に含む胎土、小形の杯で口径は7cmを計る。口縁はやや外反し、底部を欠く。6は覆土出土、色調は外面青灰色、内面灰白色を呈す。小石粒を含み、やや粗雑な胎土、やや小形で口径8.7cmを計り、口縁は直にのびる。底部を欠いている。

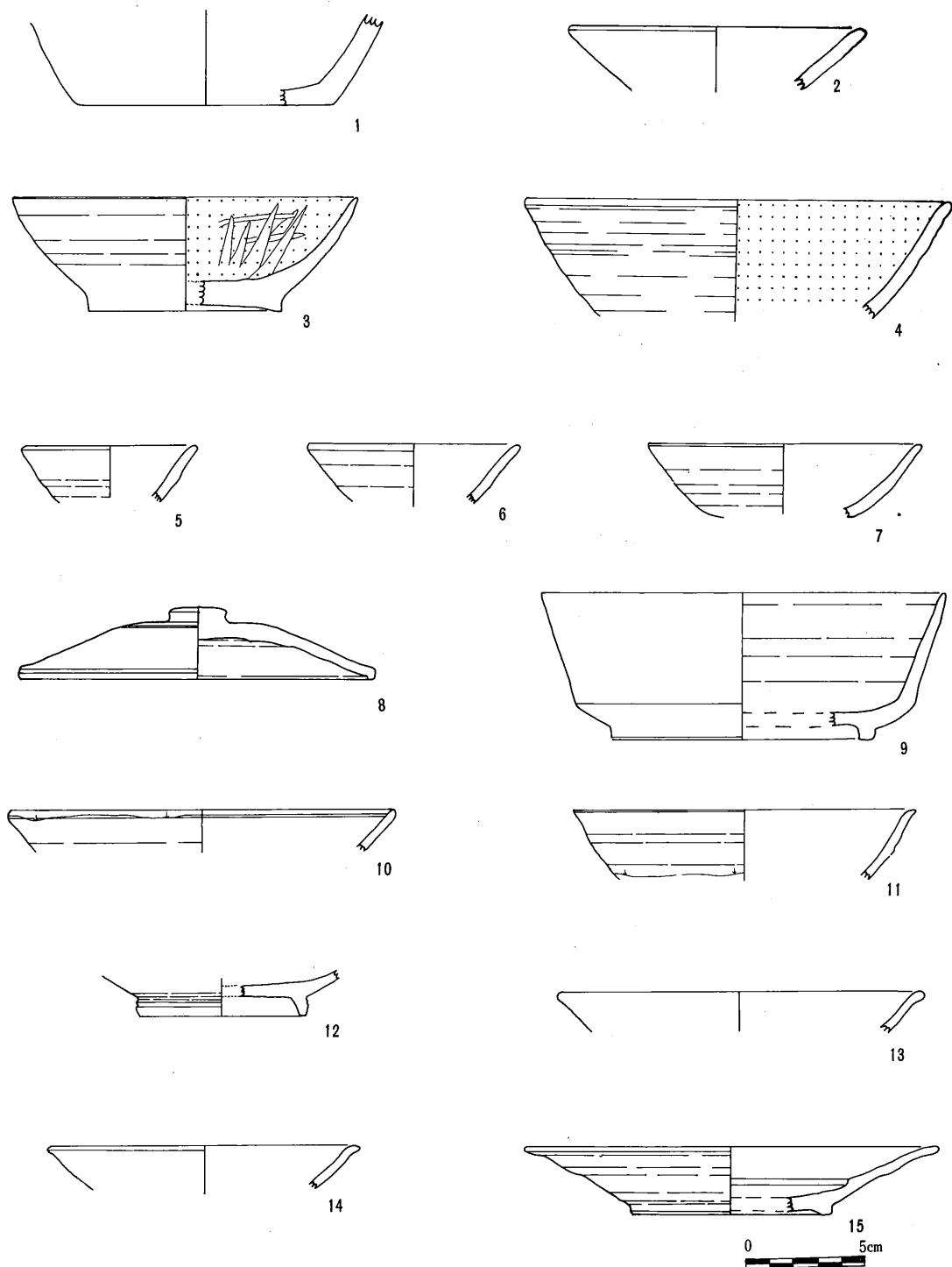
灰釉陶器（第12図、（C10, 12））

10, 12はともに覆土出土の椀の口縁と底部である。10は口径15.9cm、12は底径7cmを計る。

（田畠辰雄）



第 11 図 遺物実測図



第12図 遺物実測図

第2節 第2号住居址出土土器

第1号住居址と同様に、土師器が量的には多く、続いて、須恵器、灰釉陶器の順で、灰釉は見散される程度である。甕はカキ目痕のあるものが多く、胴部片が多数出土している。なかでも、やや粗目のカキ目痕のものが多いよう、他に擦痕のもの、ヘラナデ痕のものも出土している。土師器の壺は多量に出土しており、半分以上は内面黒色のものであり、墨書き土器も含まれている。内面の研磨されているものは少ない。須恵器は図示していないが、甕、壺、杯などの胴部、底部片が出土しているが、土師器に比べてその量はかなり少ない。灰釉陶器は碗が出土している。

土師器甕（第10図（5））

5はカマド内出土のもので、色調は内外面ともに赤褐色を呈し、雲母粒が石散されるが、胎土は緻密で、焼成はやや良好、整形技法は口縁から頸部にかけては横ナデ、胴部は擦痕があり、内面は口縁部では横ナデであるが、胴部は磨耗がはげしく不明、口径は27.5cmを計る。

土師器杯（第11図（4～15））

4, 5, 6, 7はともに覆土から出土している。4の色調は外面が褐色、内面灰褐色、小石粒を含み、雲母も微量含んでいる。口縁はやや外反し、胴部半ばでふくらみ丸味をもつ深めの壺であり底径に対して、口径の比が大きく、口径は9.9cmを計る。5の色調は内外面ともに褐色を呈す。胎土中に雲母を含む。口縁は外反し、胴部の丸味はそれほどない。口径は11.6cmである。

6の色調は内外面ともに灰褐色、雲母小石粒を含み、口縁は直にのび、胴部は丸味をもつ、ロクロによる整形痕が他の2点に比べ顕著である。口径は18.9cmを計る。7の色調は淡灰褐色、小石粒見散する。口縁は内弯し、胴部は細くしまっている。口径は15.6cmである。8～15は内面黒色の壺である。8は覆土中より出土、外面の色調は暗茶褐色、小石粒を含み、胎土は粗雑である。口縁は直にのび、胴部の丸味はそれほどない。底部は糸切りである。内面は研磨されておらず、外面の口唇の一部にまで内面の黒色がのびている。口径13.7cm、底径6.7cm、器高4cmを計り、胴部のロクロ整形痕顕著である。9は覆土中の出土、外面の色調は暗茶褐色を呈し、雲母を少量含んでいる。胴部から口縁にかけて直にのびる。内面の黒色が外面の一部口唇にのびている。口径15.5cm、胴部下半を欠いている。

10はカマド内出土、外面の色調は灰淡褐色を呈し、雲母、小石粒を含んでいる。胴部にやや丸味をもつ大型の壺である。底部は糸切り、底径7.5cmを計る。11は覆土中出土、色調は外面明褐色内外面ともにかなり磨耗している。底部近くに浅い2条の沈線がはいっている。口径9.7cm、底径5.3cm、器高3.5cmを計り、底部から口縁にかけて直にのびている。12は覆土中の出土、口縁はやや外反し、胴下半部に丸味をもっている。色調は外面暗茶褐色、雲母を多量に含んでいる。内面は研磨されていない。口径13.0cm。

13は覆土中出土、外面の色調は暗茶褐色を呈し、雲母、小石粒を少量含む、口縁はやや外反する内面は研磨されていない。10.7cmの口径。14はカマド内出土、外面の色調は明褐色、雲母を含み胎土は緻密である。内面は研磨され、暗文がある。胴下部はかなり丸味のある壺で、底径は6.0cm底部は静止糸切りである。15は覆土中の出土、外面の色調は灰淡褐色、雲母、小石粒を含む。胴下

部に墨書あり、書体は不明である。胴部にやや丸味をもつとおもわれ、内面は研磨されていない。
底部は静止糸切り、底径 6.3cm を計る。

(田畠辰雄)

第3節 第3号住居址出土土器

土師器と須恵器、灰釉陶器が出土している。土師器の量が多く、須恵器、灰釉陶器は少ない。甕は長胴形のものがほとんどで、整形技法はカキ目痕のあるもの、ヘラナデ痕のあるもの擦痕のみのものなどがあるが、カキ目痕のあるものが主流をしめる。壺は内面黒色のものがほとんどで、須恵器は壺、甕の破片が少量出土しているが、図示はしていない。また、灰釉陶器も微量ではあるが出土している。

土師器甕（第10図（6～7））

6はカマド内出土で、色調は外面明灰褐色、内面明褐色を呈し、雲母を多量に、小石粒を少量含んでいる。焼成は良好、内外面ともに、口縁から頸にかけて横ナデ、頸部に小さい稜をもっている。胴部の整形は、外面頸部下から胴部にかけて、極細の縦方向のカキ目が、内面は、ヘラ状の工具による横方向の削りが胴部上半まで、それ以下は擦痕が認められる。口径 18.8cm を計る。7はピット内出土、色調は外面暗灰褐色、内面は暗褐色を呈し、雲母を少量含む胎土をもつ。外面の口縁から頸部にかけて横ナデ、頸部下から胴部にかけては、6より若干粗めのくし状工具による縦方向のカキ目、内面は口縁から頸部上面にかけて横ナデ、頸部から胴部にかけて、くし状工具による横方向のカキ目、外面のそれよりやや粗めの工具を使用している。また、内面口唇部が内側にくびれている。口径 21.3cm を計る。

土師器杯（第11図（16～18））

（16～18）はともに覆土中より出土している内面黒色の壺である。16は外面の色調暗褐色を呈し口縁が外反する。内面は研磨され、暗文がある。17は外面黒褐色、底部糸切り、18は外面茶褐色を呈し、雲母を少量含み、口縁が外反する。ともに内面は研磨されていない。口径は16が12.2cm、18が9.5cm、17の底径は5.9cm を計る。

灰釉陶器碗（第12図（13～14））

（13～14）は覆土中で、口径は13が15.4cm、14が13.1cm を計る。

(田畠辰雄)

第4節 第5号住居址出土土器

土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。遺物の量は多く、大部分が破片の姿が出土している。土師器、須恵器の量が多く、それに比べ灰釉陶器の出土量は少ない。土師器では、甕、壺、壺蓋などが出土しており、甕は、やや粗めのカキ目痕を有する破片が多数をしめ、ヘラナデ内などのものは少ない。壺は内面黒色のものがほとんどで、他は見散される程度である。

須恵器では、壺、壺蓋、水甕、壺などの破片が出土しており、壺の量は比較的多い。灰釉陶器は少量で、碗の破片、段皿などが出土している。

土師器甕 (第10図(8))

外面は黒褐色、内面は黒色の色調を呈し、整形技法は、外面口縁から頸部、肩部にかけては横ナデ、胴部は、巾細のヘラ状工具による縦方向のナデ整形、内面は胴部が、ヘラ状工具による横方向のナデ整形がおこなわれている。口径は20.5cm、緻密な胎土をもっている。

土師器杯 (第12図(3~4))

3は外面が明褐色、口縁は直にのび、胴部に若干の丸味をもつ。底部は高台のごとくに出っ張っている。内面は研磨され、暗文がある。口径14.4cm、底径8.1cm、器高4.8cmを計る。

4は外面淡灰褐色を呈し、口縁はやや外反ぎみ、大型で椀に近い形状のものである。内面は研磨されておらず、その口径は17.8cmを計る。

須恵器杯蓋 (第12図(8))

8の色調は暗灰青色を呈し、小石粒を含んでいる。径が14.9cm、器高3.1cmを計る。

須恵器杯 (第3図(9))

9は高台付の坏で、底部から口縁にかけて垂直にあがり、ロクロ整形痕はさほど顕著ではない。青灰白色を呈し、口径16.9cm、底径11.0cm、器高6.2cmを計る。

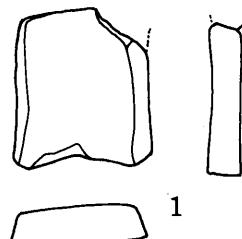
灰釉陶器段皿 (第12図(15))

15は内面一面に自然釉があり、ロクロ整形痕が顕著である。口径17.4cm、底径8.5cmを計る。良質のものである。

(田畠辰雄)

第2節 石 器 (第13図(1))

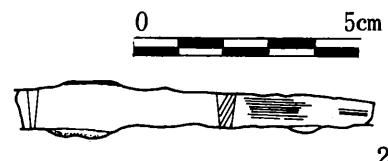
第1号住居址の床面から出土した砥石である。淡いうぐいす色を呈する石で、中央部が凹んでいるが、両端は台形状となる。長さ3.3cm、巾3cm、厚さは5mm前後を計る。



第3節 鉄 器 (第13図(2))

第3号住居址の覆土中から出土した刀子である、全体の半分近く欠損しているが、柄の部分には木質部が若干残っている。

(田畠辰雄)



第13図 遺物実測図

第IV章 ま と め

本遺跡では合計6軒の竪穴住居址が確認され、第5号住居址は遺物等が全くなく時期は不詳であるが、他の5軒はすべて平安時代の住居址であった。

本遺跡の地形は西に向ってかなり傾斜が強く、発掘地点から約1km西方に小御堂遺跡がある。この地点までくると傾斜はゆるくなるのであるが、なお続いている。

発掘地点からの西方の急傾斜地は一帯が沼地になっており、耕土下1m位堀り下げると水がわく状態であった。

遺跡は発掘地点より北側の墓地や民家のある方へのびているものと考えられる。

本遺跡の附近には、根本谷古墳、テマテ古墳、如来堂古墳等の古墳が立地しているが、それらの古墳と関連する時期の住居址等は確認されず、遺物も発見できなかった。

本遺跡出土の土器の概要はおよそ次の通りである。

土師器の甕は長胴になるものが多いようで、口縁部には横ナデがほどこされ、頸部には弱い稜線をもつもの、沈線をめぐらしてあるものなどが含まれており、また胴部の成形もカキ目を有するものが量的に一番多く、粗いカキ目を有するものもふくまれている。これらの甕は奈良時代から平安時代にかけての土師器の甕に一般的にみられる特徴である。

土師器の壺は内面黒色のものが多くみられ、形状は碗に近く、糸切底のものである。本遺跡から出土したものは、内面がヘラ磨きされたものより、そうでなく、がさついた感じの砂質の胎土をもつものが多く出土している。また墨書き器も一点含まれていた。これらの土師器の壺は9世紀から10世紀代に比定しうる特徴をもっていると考えられる。

須恵器に関しては、壺・蓋は、割合に器高が高く、端部を急角度で折り曲げ、口クロ整形の痕が顕著な新しいタイプのものであり、壺は、口径に比し底径の小さいものが多く、口クロ整形痕もあり顕著なものは少ないようである。高台付のものは図上復元可能なものは一点のみであったが、体部は直立し、深いもので、色調は青灰白色を呈するものである。他には、甕、壺などの破片も出土している。

本遺跡からの灰釉陶器の出土量は、土師器、須恵器に比してすくなく、黒笛90号窯期に比定されるものが多いように思われる。

遺構はかなり狭い範囲に集中しており、発掘地点より西方が沼地である関係上、発掘地区およびそれより他方に遺構があるものと考えられるが、それらの地点は、地区外及び民家となっているために調査不能であった。

住居址の形態は長方形のものばかりであり、すべてのカマドは原形をとどめず、柱穴等もあきらかでなく、良好な状態で残っていたとはいえない状態であった。また住居址の床面の比高差もかなりあり、第1号住居址の床面と、第4号住居址の床面との差は約1mほどもあり、第6号住居址の床面は第4号住居址の床面よりなお低い位置であった。

堀立建物址等の遺構は検出されなかった。

(田畠辰雄)

図 版

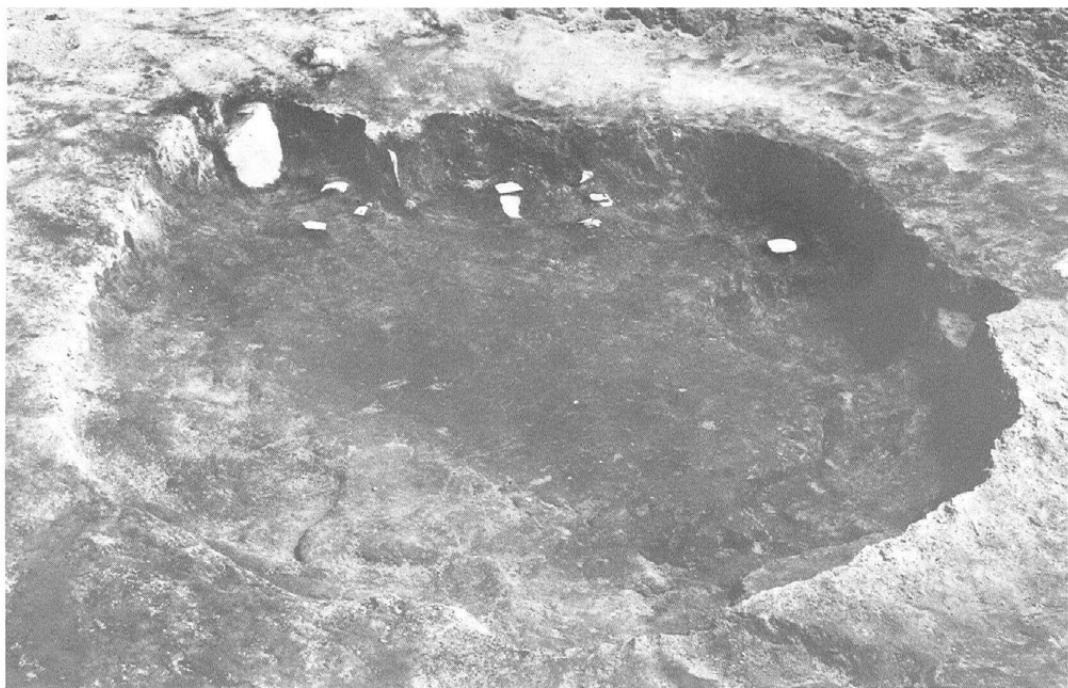


遺跡地を南側より眺む



遺跡地を西側より眺む

図版 1 遺跡全景



第1号住居址



第2・3号住居址

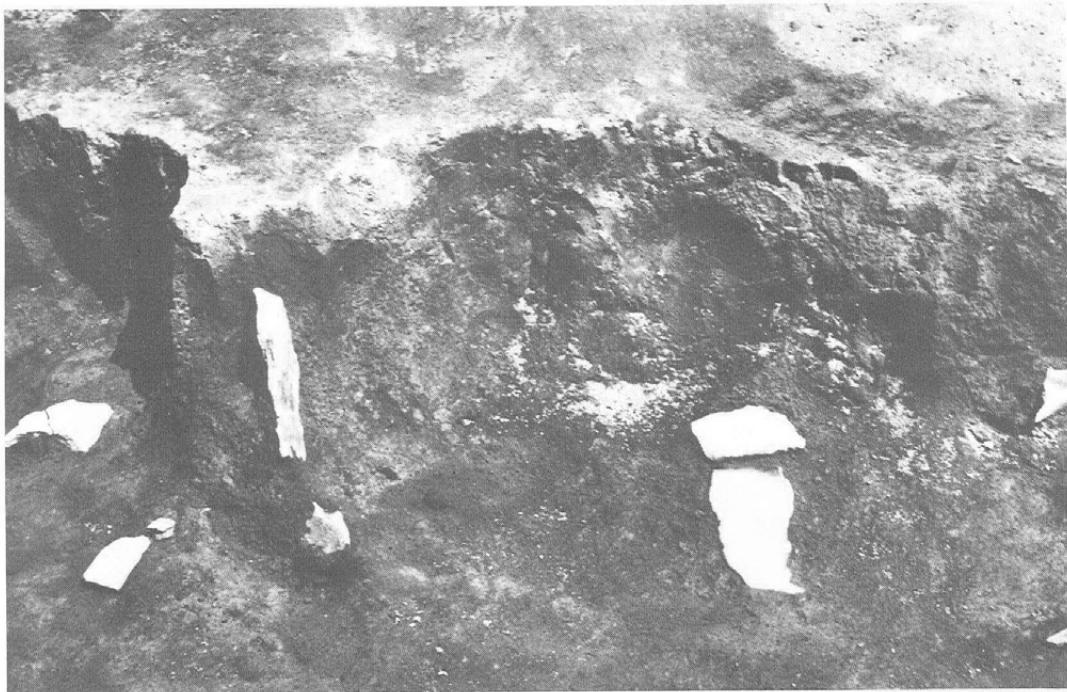
図版2 遺構



第4号住居址



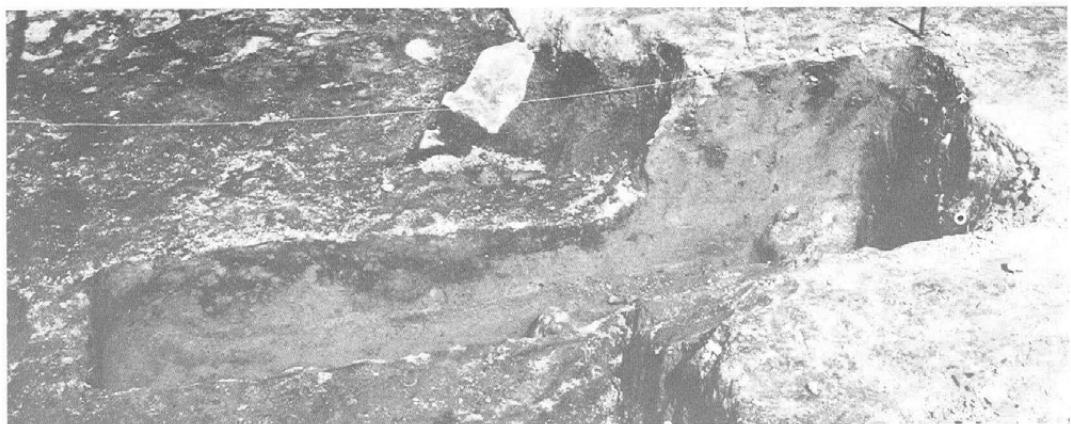
第6号住居址



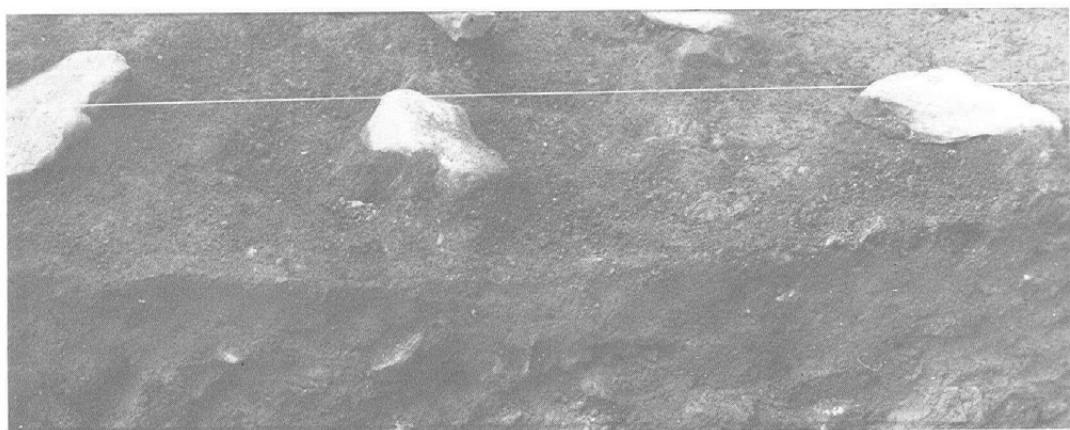
第1号住居址カマド



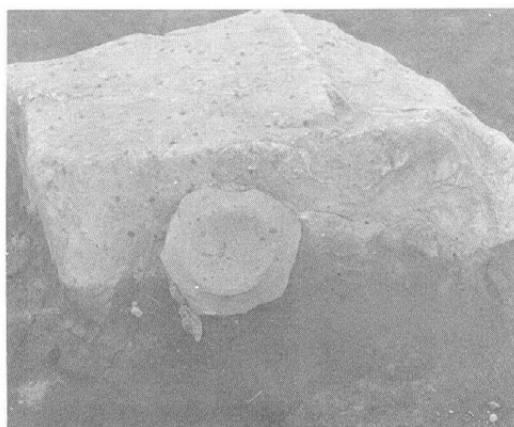
第2・3号住居址カマド



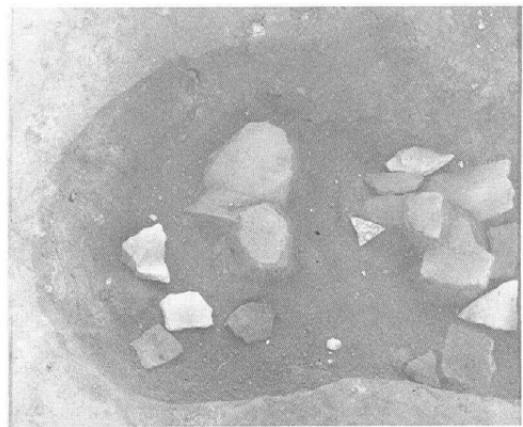
第1号住居址カマド断面



第4号住居址カマド断面



第2号住居址遺物出土状況



第3号住居址遺物出土状況

図版5 遺構及び遺物出土状況

根木谷中畠遺跡緊急発掘調査報告書

昭和 52 年 3 月 15 日 印刷

昭和 52 年 3 月 18 日 発行

発行所 伊那市教育委員会

印刷所 岡谷市川岸 108

中央印刷株式会社

